
私と彼の甘いはずの日々

コノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と彼の甘いはずの日々

【Nコード】

N6947K

【作者名】

コノハ

【あらすじ】

私、綾瀬恵くあやせ めぐみ。

私には好きな人がいます。

あの人が好きです。好きです！

そんな風に愛を（心のうちで）叫び続けて二年間。

高校三年生になった今、その想いがようやくかなおうとしているのです！

だから！私は礼人君のためになら、なんだってできるのです！

……と、思っていたんですけど……？あ、あれ……？あ、あの、
礼人君……？

これはそんな私の奮闘記！

始まりの始業式

朝の日差しがまぶしいくらいに強くなってきた今日この頃。
学校の桜はもうすぐ満開になるつかという季節です。

私は今歩きなれた住宅街をどこか新鮮な気持ちで歩きながら、自分を通う高校に向かっていました。

今日は始業式。今日から私は高校三年生になります。

「あ、おはようメグ」

「おはよう、クレアちゃん」

私を校門のところで待っていたのは、高校からの友達、クレアちゃんです。

彼女の名前がカタカナなのは海の向こうで生まれたからで、その割に流ちょうな日本語をしゃべるのは、こっち育ちだから……らしいです。

流れるような黒髪に、知性に富んだ表情、顔立ち。

背は少しだけ高めで、びっくりするぐらいセーラー服が似合っています。

私なんかじゃ、比べ物にならないくらい。

「ごめんねメグ、先にクラス表見てきちゃった」

「え〜！……で、どうだった？」

「今年も私と一緒に」

「それもうれしいけど！そうじゃなくて！」

「くすくす、大丈夫よ。ちゃんと意中のあの人も一緒にだから」

「やたっ！」

そのことを聞いて。私は小さくガッツポーズをします。

『あの人』。私の憧れで、私の好きな人。

今は片思いですが、きつと、きつと！

「…………でもさ、メグ。また眺めるだけじゃないでしょうね？」

「うつ…………」

ぎくりと、私はクレアちゃんという言葉に反応しました。

はい、そうです。実はあの人…………兵部 礼人君とは高校二年間ず

つと一緒になのに、私は声をかけることもできないのでした。

…………いや、もう高校三年間ずっと一緒なのは決まりました。

今年こそ！私が礼人君の意中の人になるんです！

「お〜お〜、燃えてるねえ。ま、私も応援してるから、頑張っ

ね

「うん！ありがとクレアちゃん！」

「どういたしまして」

それから私たちは、なんてことない雑談をしながら教室へと向かったのです。

で、始業式が終わって、担任の先生が来るまでの休み時間？のよ
うな空き時間になりました。

「ねえ、クレアちゃん！」

「…………なに？」

クレアちゃんとは隣同士の席になりました。……ううん、なんか毎年こんな感じ。何か運命でもあるのかな……？別に、クレアちゃんならいいですけど。

「どうして校長先生の話ってあんなに詰まんないんだろうね？眠くなっちゃうよー！」

「そりゃ、マニュアル見たまんまの話しかしないからでしょ？心がこもってないから人を惹きつけないのよ」

「え、あのお話って全部マニュアルあるの？」

「全部かどうかは知らないけど。この前テレビでやってたわ」

「へえ〜」

クレアちゃんがテレビの言うことを信じるなんて、珍しいです。

なんか、いつも私がテレビのこと言ったら

『テレビってのは虚構よ、虚構。小説や漫画と同じ、フィクションよ。……なまじ現実のことを取り上げるだけに、余計に性質が悪いわね』

とか言つのに。

「……って、何あんたは私に話しかけてんのよ。兵部に話しかけなさいよ」

「え、でも、もう男友達が……」

「まったたく、しょうがないわね」

そう言うのと、しばらくクレアちゃんは顎に手を当てて悩みます。

……何を考えているのでしょうか？

「……よし、あんたはちょっとここにいなさい」

「へ？」

「そうそう、お弁当、明日から一人分多く作るのよ？」
「へ？へ？」

お弁当？もう一人分？どうして？

なんて私が戸惑っている間に、クレアちゃんは礼人君のところに行きます。男友達なんのその、描きわけてます。すっごくかっこいいです。

「ねえ、兵部」

「なに？ボクに何か用事？」

「私じゃないわ。……………あの子」

そう言っ指さすのは、私の方向。…………いや、まさしく、私です。つてええ！？

「行ってあげて。……………ね？」

「……………わかったよ」

そう言って礼人君は私のところに、え？え？夢？……………いやいあっやいやいいえ？

「用事って何？」

「あ、え、えと、あの、その」

何を言えはいいの？え？も、もしかしてこれが最後のチャンスだったりする？

この前クレアちゃんが言っただ格言を思い出します。

『チャンスつてのはね、何度も来るわ。……でも、一度つかみ損なったら、もうそれはチャンスだとは気付けないのよ。……だから、私はチャンスは一度きり、って思ってるの』

え、て、ことは、これが最後？え？え？

「……どうしたの？なにも用事ないの？」

「あ、う、あ、あのそのそのあの」

何か口実を考えなきゃ、一瞬でも長く、一秒でも長く、憧れの礼人君に近付かなきゃ！

でも、何も思いつきません！ど、どどどどつすれば……！

と、その時。

『お弁当、明日から一人分多く作るのよ？』

さっきのクレアちゃんのセリフを思い出しました。

「あ、あの！お、お弁当！」

「…………お弁当？」

私は立ちあがって、言います。…………呼びます？叫んだような気がします。

「あ、明日から礼人君のお弁当、作らせてください！」

教室中の会話が、途絶えました。

…………え？へ？

「…………バカ」

クレアちゃんのそんなつぶやきが聞こえるぐらい、教室は静まり返っています。

「…………くす」

「？」

一瞬、礼人君がすごく嫌らしく笑ったような気が…………。うん、気のせい気のせい。

「いいよ。よろしくお願いしようかな？」

「あ、はい！」

だって、こんなに優しくお願ひしようかな？
は絶対気のせいです。

ああ、これからきっと礼人君と仲が良くなるんだろうな……。

って、思っていました。クレアちゃんのいぶかしげな顔を見ておけば、そんなこと思いもしなかったはずなのに……

「相談しましょう親友に！」

「キー……」

「ただいまです！」

大きな声で私は家に入りました。

「お帰り、メグ」

「お帰り〜姉ちゃん」

お父さんと妹があいさつしてくれます。

「お母さんは？」

「仕事。今日は遅くなるってさ」

「そうですね……残念です」

お母さんは働いていて、お父さんは専業主夫。妹は小学4年生。こんな家庭環境ですから、私の家はいつもお母さんがいないことが多いのです。

「姉ちゃん姉ちゃん、敬語になってるよ？」

「あ、ごめん」

「ま〜た礼人君と何かあったの？」

「みぎやつ!？」

ちなみに、妹には礼人君のことを話しています。妹に恋の相談をされたときに、つい、ポロっと……。

「……………礼人君？……………男かッ！？」

「ち、違いますよお父さん……………」

「メグが嘘つく時はいつも敬語……………ッ！許せん！その礼人とやらを連れてこい！刀の錆にしてくれる！」

「お父さん！」

うちのお父さんはいつつもこんな感じ。クレアちゃんに話したら、『いいんじゃないの？大事にされててさ。……………ほっとかれる方が、案外堪えるよ？』って言われました。

礼人君も礼人君でわからないことあるけど、クレアちゃんも謎なところいっぱいあるんだよなあ……………。

「……………まあ、その、なんだ。とにかく、刀の錆にはしらないと思うはずだから、恋人ができたら連れてくるように」

「……………うん」

礼人君を恋人に、……………かあ。できたらいいなあ……………。

私はそんなことを考えながら、二階にある自分の部屋に向かいました。

ピンク一色。

それが私の部屋です。

礼人君が好きだと気付いた時からコツコツコツコツ少しづつ、女の子らしい部屋にしようと頑張ったおかげで、そんな部屋になりま

「！」

それをマシだと思っあなたも十分すぎるほど十分ですが……。

「で？今度はどんな妄想で別れ話切り出されたわけ？」

「え、いや、その……。この部屋のことです。」

この部屋は私の中にある『乙女な部屋』を具現化させただけのもので、私の趣味ではありません。家族である可憐はもちろんそんなこと知っていますし、私が実は趣味通りのお部屋にしたいと思っていることも知っています。

「……まゝた自分の趣味のことで悩んでたんだ？」

「うん。この部屋やめて私の趣味通りの部屋にしたら……あなたはどうなると思っ？」

「彼を……連れてこれるかどうかいって、もし、ってことね？」

「うん……。」

私がうなずくと、可憐は数瞬悩んで、

「その瞬間別れ話を切り出されるんじゃない？」

「やっぱいい？」

非情な現実を突きつけてきました。

「まあ、その礼人君って人がお姉ちゃんの趣味に合えば……もつと仲良くなれるかも、だよ？」

「……そうかな？」

「逆に、今の『乙女チック』なお部屋でも、マイナスイメージに

なるかも、だよ?」

……それは盲点でした。

「え?そ、そんなことってあるの?」

「……私に訊かないでよ。私小5よ?人生経験も何もかもお姉ちゃんより下なんだよ?わからないんだっいたらいつもみたいに『相談役』で『大親友』で『幼馴染』のクレアさんに訊けば?って言うか私は断ぜんそつちをお勧めするよ」

可憐はどういうわけか、クレアちゃんのことをかなり尊敬しているのです。……なんででしょう?いい人には間違いないんですけどね。

「……じゃ、私はこれで。もう叫ばないですよ?聞いているこつちが恥ずかしいから」

「う、うん……」

パタリ。

なんか、小学五年生の妹にあんな言われ方してる姉って、私ぐらいじゃないでしょうか……?って思っちゃいますね。

まあ、とにかく電話です。クレアちゃんに訊いちゃいましょう!起きてるかな……?」

私はベッドに寝転がりながら携帯電話を耳に当てました。

相談中〜相談中〜

トウルルル……

トウルルル……

ピ。

『はいもしもし、クレアですけど?』

「あ、クレアちゃん?私、メグ。夜遅くにごめんね?」

『メグか。いいよ、暇だったし。で?今度は何の相談?』

「バレバレかあ……」

『あつたり前よ。何年あなたの幼馴染やってると思ってんのよ』

「……十年?」

『リアルな数字は出さなくていいの。……で。何?』

ぱつと相談しやすい雰囲気を作ってくれるのは、やっぱりクレアちゃんだからでしょうか。相談しやすい、って思うのは幼馴染だからでしょうか?

「あつと、その。私の部屋のこと、なんだけどね……?」

『えなに、どうかした?』

「……このままでいいと思う?」

しばらく、無言です。

『……え、まだ一昔前の少女マンガにでも出てきそうなラブリーで乙女チックな部屋のままだったの?』

「そこから!?!」

『いや、確か『女の子らしい部屋にする！協力して！』って言ったのって、高校一年の時……だよな？それから二年あったけど、まさか本気で今でもそのまま？』

「う、……悪い？」

きつと、今鏡を見たらゆでられたタコみたいに顔が赤くなってる私が映るんでしょう。……あの頃は、その、思い出したくない人生の汚点と言っか、その、なんというか……。

『悪かないけど……。もしかして、兵部が来たときに備えて、自分の趣味、隠してるとか？』

「……悪い？」

『悪くはないけどさ、あんた兵部の趣味把握してる？』

「え、いや、ただだけど……」

『まだ、つてことはする予定なんだ』

「当たり前です！」

『……で、もし兵部が乙女チックすぎる女の子が嫌い、もしくは苦手としていた場合、どうするつもり？』

「う……。で、でも！私の趣味だつて、その、男の子に好かれる趣味とは、その、限らないし……」

『あのね。あんたの好きにした部屋でも、嫌われるもしくは避けられる可能性があるし、今のままでもそうなんでしょ？同じ嫌われるんなら、ありのままを嫌われたら？作った趣味が原因で嫌われたら、やりきれないわよ？』

むぐ、と私は言葉を詰まらせます。

『てか、まだ家にあげるところか付き合つてもいないのにそんな先のこと考えてる場合か！あんたは真つ先に心配しなきゃいけないことあるでしょが……』

「え？」

『弁当よ弁当！考えた？』

「……………あ」

し、しししししまったあああああああああ！？

わ、忘れてた！……………わけじゃないけど！けっして忘れてたわけじゃないですけども！

『……………忘れてたわね？』

「ま、まさかそんなわけじゃないですかクレアさん！」

『嘘つく時は敬語になるって、あんたほんつとにわかりやすい癖ね』

「ふみゆ！」

『唸つてもダメ。……………とにかく、あいつの好きな料理、教えてあげるから早くメモリなさい』

「あうん！」

私はいそいそとそこらへんにある紙を使って、クレアちゃんが言う礼人君の好きな料理をメモしていきます。

「……………ハンバーグに、肉じゃが、カレー、と。これで全部？」

『まあね。もっと知りたかったら本人に訊きなさい』

「うん！……………あれ？」

『どうしたの？』

ふと、何かに気がきます。

「……………なんで礼人君の好み、知ってるの？」

無言。

無言です。

無言が怖いです！

え、なんですかこの展開！？

こんな些細なことで十年來の友情にヒビが入ったり、なんてことは……！

『……偶然？』

「クレアちゃんも私とおなじぐらいわかりやすい嘘つくよね！？」

なんで考えに考えた結果の嘘がそれなんですか！

ま、まさかまさかまさか！

「まさかクレアちゃん、礼人君と付き合ったことあるんじゃない……」

『……まさか』

そ、その異常に多い……』はなんですか！？

「く、クレアちゃんの……」

『……あの、メグ？』

「裏切り者おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお……」

ブチン！

私は携帯を床にたたきつけるようにして切りました。

……くすん。ひどいよ……！

礼人君とクレアちゃんが付き合ってたなんて、知らなかったよお……。なんで教えてくれなかったの……？

優しい礼人君と、冷静沈着なクレアちゃん。

すっごくお似合いだ……。私なんか勝てるわけない！

……いや、違います！

私は一瞬生まれかけたネガティブな感情を否定しました。そうです、違うのです！

勝つ、勝たないの問題ではありません！

私がどれだけ礼人君のことを好きか、重要なのはそれだけです！
クレアちゃんは現在進行形で付き合っているのなら黙っているよ
うな人じゃありません。

ならば！今は礼人君はフリーの可能性大！です！

いつまで付き合ってたのか、とか気になりますけど今は無視です！
絶対に！夏休みまでに礼人君と付き合って！

「甘い甘い高校三年の夏休みを送るんです！」

「……お姉ちゃん、黙ってよ」

「はっ、可憐!？」

気がつくとも可憐が部屋の扉で不機嫌そうに立っていました。
じとーっと、尊敬の欠片も感じられない目で妹が見ています。な、
何かまずいことでも言ったのでしょうか……？

「また声に出してるよ？叫ばないでって言ったでしょ？」

「ご、ごめんね……？」

「……クレアさんから、伝言」

「へ？」

なんでクレアちゃんが妹に伝言を？てか、なんで伝言を頼めるの？

「『ごめんなさい』だってさ」

「……そう。ありがとう」

どういう意味なのだろう。どういう意味なのだろう。

「……クレアさんは、裏切らないよ」

「え？」

「あの人は、友達を裏切るような人じゃないと思う。もし、礼人君を好きになったのなら、真っ先にお姉ちゃんに言って、ライバル同士よ、見たいなこと言うと思う」

……そうだ。きっとクレアちゃんはそれでもごめんなさい、って謝りながらも、正々堂々戦おうとか言うに決まってる。

裏切るわけなんか、ないよ。

「……わかってるわ、そんなこと」

「そ。じゃ、おやすみ」

「おやすみ」

もう叫ぶなよ、って視線で言いながら、妹は部屋を出て行った。

……寝ましようか。明日は礼人君のお弁当作らなきゃいけないんだし。

あ、でもお洋服着替えてご飯食べてお風呂に入って歯磨きして……。

あつう、すぐに眠りたいのに眠れないよう……。

……って、あれ、じゃあ可憐はなんでおやすみなんて言ったんだろつ？

そう思って、すぐに私は思い出しました。

あ、そう言えば可憐って今ダイエット中だった。

大丈夫かな、って心配してるんだけど……ま、いつか。いくらなんでも死にそうになったら食べるでしょ。今までもそうだったし。

私は絶対に絶食ダイエットなんかしないぞ！ってひそかに誓いながら、私は晩御飯のお手伝いをするため、部屋を出たのでした。

私の両親は、いろんな意味で特殊です

とととととと。

階段からおつこちないように気をつけながら、私はキッチンに向かいました。もうすでにお父さんはお料理を始めていて、一階のリビングにはもういい匂いが漂っていました。

「あ、お父さん、私手伝うよ」

「ああ、すまないね」

お父さんは中肉中背で、性格もいい人だし、礼人君によく似ています。いえ、きっと礼人君がお父さんに似ている、と言った方がいいのでしょうか……。まあ、つい、思っちゃうんです。

「可憐はどうしたの？」

「寝てる。きつといつもの絶食ダイエットじゃない？」

「……あまり年頃の子どもにそんな無茶な食生活してほしくないんだけどなあ……」

悲しそうにお父さんは言います。ご飯を一緒に食べれないことも、残念がつているようでした。

「だ、大丈夫だよお父さん。可憐は別にお父さんのお料理が食べたくないっていうわけじゃないよ！」

「本当にそうだろうか……？ ダイエットというのは建前……いや、口実で、本当はあの子にはもう彼氏……いや、婚約者がいて、その人に食べさせてもらってるんじゃないだろうか？ ああ、最近の子は

そういうのも早いつて聞いていたし、いや、昔だつてあの子あたりの年齢になると婚約していたんだ、ここに三十年の日本がおかしかっただけなんだ、今のあの子は元の日本人に戻っただけで………ブツブツ」

「お、お父さん！？お、落ちついてください！し、しつかり！可憐にはまだ彼氏どころかボーイフレンドもいませんって！」

あわわ、また始まつてしまいました、お父さんの絶望癪。なんでもかんでもネガティブに考えて勝手に絶望して勝手にどん底までいつてひどい時には勝手に樹海に行こうとする、そんなとんでもない癪です。今の絶望は……軽い方ですね。まだまだ大丈夫です。ひどい時は死んでやるつて言つて利かないんですから。

「そ、そうなのか……？」

「うん、本当だよ？」

「……そうか。そうかそうかそうか。それはそれはよかった。本当によかった。よかった……」

「……ほっ」

「どうかしたかい？」

「ううん何でもありません！……さ、ご飯作るの手伝つよ？」

「ああ、悪いね」

よかったです。今ここにお母さんはいませんから、もし絶望しすぎてどん底になってしまったらエプロンつけたまま樹海に行きかないですから……。ホント、止めなきやいけない家族の身にもなつてほしいですよ。

「……ああ、そつだ恵」

「なんですか？」

何でも無い風に私は返事しましたけど、実はびっくりしていたのです。私のことをお父さんが恵、だなんて呼ぶなんてめったにないことです。いつもはメグ、メグ、って言ってるのに……。なんだか、真剣なお話でもされるような感じがします。

「キミは……恋愛とか、どう思ってるんだい？」

「ふえっ!？」

なんでお父さんから、こ、ここここ、こんな質問が!？

「ど、どどどどど、どうしてそんなことをお聞きになるのですか？」

「……少しね、気になって」

「何がですか？」

「恋が全て……そんな考えになっていやじゃないか、ってね」

「……」

私は少しだけ、何も言えませんでした。この二年間、まさにそれだったからです。礼人君のために、礼人君のために、ってずっと考えていました。

「まあ、それが悪いことかと言えば……うん、悪いことだよ。目が狭くなるからね。……礼人君、だったかな？」

「ふえ？」

「隠さなくなっちゃっていいよ。好きなんだろう？」

「みゃ!？」

な、なななななんでお父さんがそれを!？

「お、おおおおおお父さん、そ、それはそのそれがこれであ

あなつて」

「別にかまわないさ」

「え？」

「いいかい、恵。恋をしてキミは変わるだろう。実際、変わったしね。……あとは……恋人が彼氏になるまであとどうするか、だね？」

「は、はい……」

もう私は観念しました。……なんでお父さんがこのことを……？
本当に不思議です。なんででしょう？何があったのでしょうか……？
？どうしてばれたのでしょうか……？

「後悔しないようにしなさい。男親のボクがキミに言えるのは……
……これだけさ」

「……は、ふあい……」

「……ふふふ、さあ、続きをしようか。ハルに美味しいご飯を作
つてやらなきゃ。きつとおなかをすかせて帰ってくる」

「はい……」

ハル、と言うのは私のお母さんのことです。春香^{はるか}、だからハル。
一度だけ呼び方をハルにやんにするかどうかお母さんに提案してブ
ッ飛ばされたみたいですけど……。今の呼び方で本当によかったと
思います。

「……た〜だ〜い〜ま〜！」

「お帰りなさい！」

「おかえり〜！」

お料理……ハンバーグが出来上がったところ、まるで見計らったみ

たいにお母さんが帰ってきました。

「……ううん？これはいい匂いね。……でも、肉は今パスしたいかな……」

「どうしたんだいハル？また？」

「最近多いね、お母さん。大丈夫？」

げっそりとした表情でお母さんは私たちが作った晩御飯をいらない、と言いました。……でも、仕方ないことですし、もしハンバーグじゃなくても、きつとお母さんは今日ご飯を食べなかった……いえ、食べれなかったでしょうから。

「……はあ。まったく。最近多いのよね、列車飛び込み。いくら見慣れているとは言え今日のは特にヒドくてさ……ぐちゃぐちゃのべちゃべちゃで。人の原型とどめてないって言うか、……そうそう、そこにあるミンチあるじゃない？まんまそれで。ああもう……なんて言うか……吐きそうだった……」

「……そう。災難だったね、ハル」

「……うっ……」

私は想像して少し呻きます。な、なんで食事前にお母さんはそんな残酷なことを言うのでしょうか？

……お母さんの職業は警察官。現場最前線にいる警官で、しかもなぜかそっち方面の部署に回されてしまったみたいで、毎日のようにぐちゃぐちゃなホラー顔負けのスプラッターとか見ているのです。……私も今日みたいなお母さんの愚痴を毎日聞かされてるせいで……うっ。

「あら？どうしたのメグ。あなたらしくない」

「ほ、ほつといてください……!」

「……ああ、ご飯前だったのね。ごめんごめん」

「いや、気にしないでいいよ、ハル」

ちなみにお父さんはお母さんの前ではなぜか絶望モードに入りません。……愛のなせる業、でしょうか?……なんてどうでもいいことと考えて気持ちを紛らわせますけど……どうしても食欲は湧きません。

「……お母さん、私、もう寝るね……?」

「どうしたの?今日は早いじゃない」

「うん……明日早いから……」

礼人君のお弁当を作るんです、早起きするに越したことはありません。

「そう。……ま、頑張つてね。……ああ、高校かあ……純、たし

か私たちが逢ったのも、高校時代だったよね?」

「うん?まあね」

「昔の純つてはっちゃけてたよね」

「……ああ、うん。……その、あんまり言わないで?恥ずかしい

から……」

「あはは、ごめんごめん。……でも、あのころが一番平和で、安

穩としていた気がするわ……」

「それは間違いなく気がする、じゃなくて事実にはならないね」

「……あれ?少し口調戻ってるよ?」

「……キミもだよ、ハル」

「昔みたいには呼んでくれないんだね、ダーリン」

「……やめてください」

「うふふ、冗談よ冗談。……今日はゆっくり話しましょ?明日は

「非番だし」

「それはよかった。キミと話せる時間ができて、本当にうれしいな」

「そうですね、そうですね。でね、……が……で」

「そうそう、……は……だったね」

「うんうん！……な……」

私はそんな会話を後ろで聞きながら、自分の部屋に戻りました。

部屋に戻った私は食欲もないしやることもないので眠ることにしました。

……礼人君のお弁当、うまく作れるかな……？

そんなことを考えているうちに、私は眠っていました。

かああああああああああああああああああ！？チャンスの神様、いや
運命の女神様、一体、一体全体これは、どういふことなんですかあ
ああああああああああああああああ！！？

走馬灯のようにな、今日の思い出がよみがえります……。

午前五時。

.....

ピッ！

「.....ふわあ.....もう朝.....かあ.....」

私は目覚まし時計をパシリと叩くと、もぞもぞと布団から這い出て、大きく伸びをします。

春になって桜が開き始めたとは言え、まだ気温は冬より少し高い程度なので、パジャマだけでは少し肌寒いです。

「.....うみゆ.....」

礼人君のためにおべんと作らなきゃ.....。

私は半分眠気マナコでキッチンへと向かいました。

「.....みゆ.....」

眠いよゝでも頑張らないと.....もしかしたらこれが最後かもしれないんだし、頑張ろう。

そんなことを想いながら、せっせとフライパンを動かします。眠気で半分夢見心地ですけど、失敗なんてことはしません。私の料理の腕は今日のためにあるようなものだと思って、気を抜かず頑張ります。

そうして奮闘すること一時間。眠気が完全に覚めるころには私の

目の前に二つのお弁当が。

「……ふうっ！上出来！これならきつと、きつときつときつと礼人君も喜んでくれます！」

私は額を拭い、一息つきます。

ふう。本当にうまくいきました。自分の分はいつものようにボロボロですが、礼人君の分はそれはもうきれいに出来ています。なんせ細心の注意をはらいましたからね。ミリ単位に至るまで私の思い通りの盛り付けです。具は少なすぎることなく多すぎることもなく。豪華すぎるわけでも質素すぎるわけでもない。礼人君の好きなお料理をバランスよく詰め込んだまさに愛妻弁当！

これで私は、勝てる！

……誰にでしょう？

さて、まだ六時になったばかりですけど……学校に行きましようか。家に居てこのお弁当のことを気付かれてからかわれたりしてもなんですので。

では、出発です。

テキパキと準備をして、私は家をそつと出ました。

私の通う高校と家とはあまり遠く離れていなくて、歩いて三十分もかかりません。普段は自転車通学なのですが、今日は大切なお弁当があるのと時間が空いているのを合わせて徒歩で登校することにしました。

通学路は住宅街をずっと歩くので危険は少ないですが、買い食い等できないのが欠点と言えば欠点ですね。でも、命の危機と食いつ気を天秤にかけて後者をとれるほど私は勇者じゃありません。

朝の住宅街を、私はゆったりとしたペースで歩いて行きます。特にお弁当の形を崩さないよう気をつけながら、ゆっくりと。

……結局、ゆっくり歩きすぎて、学校に着いたのはいつもと同じ時間でした。……私の平均登校時間は八時です。つまり二時間も歩いていたという計算になります。……うわあ。

「……マジ？」
「うん、ほんと」

八時二十分ごろクレアちゃんが登校してきて、朝の出来事を……つまり、五時に起きて六時にお弁当を作り終えてその足で登校してお弁当を大切に思うあまり八時登校になっちゃったことを、話していました。話し終えた私に対するクレアちゃんの返答が、これです。

「……あんだ、意外と……その」

「なに？」

「バカ？」

「うるさいなー！いいじゃん別に！」

「あはは、ごめんごめん。でもそういうところって可愛いと思う」

「クレアちゃんに可愛く思ってもらえても……」

いつもどおりに私たちは話しているのですが……私はどうしてもクレアちゃんに対する疑念が消えません。礼人君の好みをどうして事細かに知っていたのか？それが気になって気になって仕方ないのです。一度、勝負なんかじゃないと思ったのですが、それでも気になるものは気になります。……もし、クレアちゃんと礼人君が付き合っていたら……。そう思うと、胸がもやもやして仕方がないのです。

「……ね、ねえクレアちゃん」

「何？」

「クレアちゃんはその、礼人君と……」

キーンコーンカーンコーン……。

……む、タイミングの悪いチャイムだなあ……。

「あ、先生だ。今日は早いね」

「……うん……」

結局、今日はクレアちゃんに礼人君のことを訊く機会はありませんでした。……チャンスを逃した、ってことなのかな……？

そんな心配をしつつも、私は昼休みを心待ちにしました。授業中も、休み時間もです。

え、授業？聞いてくれるわけないじゃないですか。礼人君を見つめるのに夢中ですよ。

まあ、そんな感じで時間が経って。

そして、待ちに待った昼休みがやってきました。

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
頑張るぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおー！！

心の中で叫びます。

「あ、あ、ああああのっ！」

「……あ、昨日の」

「は、ははははい！」

「お弁当、作ってきてくれた？」

「も、もちろんです！」

「……そう。じゃあ、食べに行こうか」

……？妙に、その、積極的……ですね？

私はその時、違和感をかすかに感じていました。……ここもきつと、ある意味でチャンスだったのでしょうか。いえ、運命のわけ目、だったのかもしれない。

礼人君は席を立ち、教室を出ようとなりました。

「あ、あの、ど、どこへ……?」

「屋上へ行こう。女の子とお弁当食べるときは屋上、って僕は決めるんだ」

「あ、はい!」

女の子、と言ったところに私の心はつかれました。

「……メゲ!」

「……クレアちゃん?」

引き留めるように、クレアちゃんは私の名前を呼びました。

「……その、気をつけて」

「……?大丈夫ですよ。私、今回は頑張ったんですから!」

そう言っていると私は足早に礼人君を追いかけ、屋上にたどり着きました。

特に鍵もかかっていなかったようで、私は特に気にせずに屋上に上がりました。

……この後知ったんですが……。

この学校、本来は屋上を封鎖しているはずだったらしいです。なんでもずつと昔に自殺者がどうこう、っていう経緯で。

それなのに、鍵も貼り紙もしていませんでした。……なぜでしょうね？

なんて疑問さえも、全てを知った私には浮かんできませんでした。

そして……走馬灯はすぐ直前の場面になりました。

え、ええつと、……ええつと……！？

もくもくと、黙々と礼人君はお弁当を食べています。どうやら礼人君は食事中は食事に集中する人のようので、しゃべりかけようともしてくれません。もしかしたら本当にご飯を食べておしまいなんじや……と思わせるぐらいだま……ってお弁当を食べています。

家でも友達の間でもお料理の評判がいい私が自信作だと自負するくらいなのです、お弁当そのものはとても美味しそうに食べてくれました。あんまりおいしかったので気がついていたらガつついていた……そんな見方は自意識過剰ですか？

実は食べてくれと言われたから食べただけ……そっちのほうが無断ありえそうです。……もしかして、まずいから無理して食べてそのせいで無口に？でも、ちゃんと味見はしたし、私の舌が死んでいなければきつと大丈夫……なはずです。

「……ふう。おいしかった」

食べ終わると礼人君は幸せそうに手を合わせました。

「お、お粗末さまでした」

私はそそくさと礼人君が食べたのお弁当を回収します。きれいにご飯粒一つ残さず食べてくれたことが、私の舌が死んでいなかったという証明だと、思います。

「……」めんね

「え？」

「いや、おいしかったから、話もせずには。つまんなかったら？」

「い、いえ、そんなことは」

何かまずいことをしたのではとひやひやしてはいましたが。

「……で、さ。訊くけど」

「はい」

「今、彼氏いる？」

「……いません、けど？」

なんでそんなことを訊いてくるのだろうか？私は目の前にいる男性以外を彼氏にするなんてことありえませんが。

「……じゃあ、さ。どうして僕なんかにお弁当作ってきてくれたの……？」

……いつもの、優しそうな微笑み。でも、でも。

毎日飽きることなく礼人君を見つめ続けていたからこそ、私にはわかりました。

礼人君は今、さびしがっている。さびしそうな色がほんの少しだけあって、それを必死に悟られまいとして、頑張っているように見えました。

「……好きだからです」

言っていました。気が付いたら、その言葉がすんなり、さらっと、まるで普通の会話をするかのような自然さです。……いえ、ポロリと。

「……………」

私は、その長い沈黙の意味を考えていました。

え、もしかしてダメ？私みたいなこんな女嫌？近づかれない？想いを寄せられることすら毛嫌いする？

そんなネガティブな思いが頭の中を巡り巡って、まためぐって、を繰り返します。

「……………」

「……………」

否定はしません。絶対に、たとえ本人の前でだって私の礼人君への想いを偽ったりはしません。

「……………」

「……………」

急に黙った礼人君に私は混乱して、困惑して、ただ心配することしかできません。

「本当に、俺のことが好き……………」

「……………」

「……………」

そう言ってきました。そんなうれしいことを、言ってくれました。そして礼人君は私の手を取ってもう片方の手で腰を取ってそのまま私を冷たい屋上の床に押し倒

ッ!?

そして、今。

私は床に組伏せられ、礼人君を見上げます。

礼人君は私を押し倒し、私を見降ろしています。

両手首を一緒にされて掴まれ、頭の上で押さえつけられます。私は両手が動かなくなり、礼人君は片手が開いた状態です。

「……なあ。俺のこと、好きなんだよな？」

「は、はい……」

俺。きつと、こっちが地なんでしょう。地の礼人君を知れてうれしいのですが……その、恥ずかしいです。

礼人君は膝を私の脚の間に入れて、脚を完全に閉じさせないようになっています。……な、なんだか手慣れていきますね……？こんな状況になった時女の子はどんな反応をするか知り尽くしているような、そんな感じですよ。

こんな状況になるのを何度夢見たでしょう。けれど、夢見たことがそっくりそのまま現実になっても、戸惑うだけです。

その、私思っていますけど……ねえ？

これって私……。

襲われてるんですけど……？

「ねえ、……シよ？」

無邪気に、礼人君は言うてきます。危うくうなずきかけるところでした。

ダメダメ！始めてはもつとムードのあるところか、ちゃんとした状況でって、決めてるもん！

……と、意気込んだはいいものの、どうあがいても拘束が解けません。……やっぱり、なよつとしていても礼人君は男の子なんですね。

……なんて感心してる場合じゃないよお……！

「……なにやってんの、兵部。私の親友に手を出して。殺されたいの？」

救いの声が、聞こえました。

すっごくびっくりしました。なんでクレアちゃんが？

「クレア。何の用だよ？俺ら相思相愛よ？合意の上、ってやつ。わかる？」

「わかるか。死ね」

礼人君は他人に襲いかかっているのを見られているのに私の上からどうとしません。なんか他人の目があってもやりそうな勢いなんのでちよつと怖いです……。

「……で？こんなところになんのようなわけ？」

「心配になつたから来ただけ。死ね」

し、心配？ど、どうして？

なんて、訊けません。だ、だって今私のすぐ上には貞操の危機がまだなおのしかかっているのです！ここから逃げるチャンスを逃すわけにはいきません！

「ふうん。心配？もしかしてさ、狙つてたりする？この子」

「んなわけあるか。死ね」

クレアちゃんは呪詛のように死ねと繰り返しています。こ、怖い……！

「じゃあなんで？俺と、こいつは、相思相愛なの。互いに思っ互いに愛し合ってるの。わかる？」

「わかる。けど、今こんなところで発情するなイヌ。やるなら家でやれ。それから、メグ泣かしたら殺す」

「うわ、死ねじゃなくて殺すんだ」

「殺す」

「どうやって？まさか拳銃とかじゃないよね？」

「殴り殺す。死ぬまで殴る。死んでも殴る」

ほ、ほほほほほ本気です！い、今、今確かに本気の雰囲気でした！ま、まさか私、泣いちゃだめ？も、もし泣いちゃったら親友が犯罪者になっちゃおう！

「怖いね。……でも、相思相愛だったのは認めるんだ？意外だね」

「……うるさい。とにかく、メグの上からどけ。……早く」

「いいじゃん。俺好きになっちゃったんだもん。キュンってきたんだもん。好きな相手とは触れ合いたい、これ普通じゃね？お前だってそうだろ、クレア」

ず、ずいぶんと親しげです！？クレアって、呼び捨て！呼び捨てです！

「戸惑ってる。早くどけ」

と、戸惑ってるのはクレアちゃんが礼人君となんか親しげにしてるからで……って、よく考えたらクレアちゃんは親しげじゃないですよね。……じゃ、じゃあ、二人は知り合いでしょうか？

「うれしがってるんだよ。俺と想いが通じ合って喜んでるんだ。

……な？」

コクコク。

……って、あああああああああ！？うなずいちゃいました！？う、うなずいてどうするんですか！こ、ここは強硬な態度でノゾまない！と私の貞操が……！

「……やっぱり可愛い」

キュン！

きれいな、本当の笑顔を見せながら、そんなことを言ってくれたおかげで、いや、せいで。今、すっごく胸が高鳴りました。それだけではありません。

……あ、や、やばいです。スイッチ入った。

ああ、ああああ、だ、ダメなのに。だ、ダメなのに、もうどうでもよくなってます……！なんか、このまましちゃってもいい気がします。な、なんかクレアちゃんが邪魔ものに見えてきちゃってます。ダメですダメです！屋上でなんか……

あ、あれ〜！？

な、なんで私、こんなふうスイッチ入っちゃったんでしょう…？

そうです、礼人君に最高の笑顔で可愛いなんて言われたからです！

「……つたく、何うなずいてんのよ。てかさ、あんたも発情してない？」

「……ふえ……？」

発情……？わ、私が……ですか？そんなのしてません！……と、言いきれません。……どうしてでしょう……？

「……だ〜めだこりゃ」

遠くから、ため息とクレアちゃんの声が聞こえてきました。

「ごめんね、兵部」

「ん〜。なに？」

「あんたは悪くない。……うん。悪いのは、私」

「何が？ああ、わかってくれたの？」

「うん。……だから」

「だから、こっから出て行ってくれるのか！よかったよかったふゆ！？」

フォン……ズアッ！

ドガシャーン！

「ふえ？」

ふつと明るくなつたなあ、と思つたら、礼人君がどこかに消えていました。で、礼人君がいなくなつたから、思考も視界もある程度は開けました。なんかパチリ、つていう私が起こす音まで聞こえた気がします。……今までスリープモードだったのかな？

「バカなこと考えてないで！早く来る！」

「え、でも、礼人君は」

「あんなんで死ぬわけじゃないでしょ！とつとと来い！」

「え、クレアちゃん？」

「いいから！大丈夫、私はあなたの邪魔をする気はないから！」

「で、でも」

「いいから！」

そんな風に、私はクレアちゃんに引つ張られて教室まで戻りました。……教室のみんなに何があつたかなんて説明できるはずもなく、クレアちゃんがついてくれる当たり障りのない嘘を、私は昼休みが終わるまで、神妙な面持ちで聞いていました。

それから、午後の授業を私は寝て過ごし、放課後になってようやく、クレアちゃんにたたき起こされて目が覚めたのでした。

ちなみに。礼人君は今日一日放課後になっても教室に帰ってこなかったようです。。……え？

「ど、どどどど、どこに行っただの!？」

「落ちついて!死んじやないわ。とにかく、いろいろと話あるから、私の家に来て」

「え?え、え、えええ?」

なんで?礼人君がどっかいつちゃって、放課後まで帰ってこなくて、それで、どうしてクレアちゃんのおうち?

「とにかく、きて」

「な、納得のいく説明を」

「するから、来て」

「で、でも」

「……どこでしていいの?」

はっとなります。

ここは教室。みんなはもう帰り始めていると言ってもまだまばらです。もしかしたら襲われかけてどうのこつもの、とかいう話を聞かれちゃうかもしれません。もしその人が正義感の強い人だったら、先生に言っちゃうかもしれません。そんなことになったら……!

「もし、先生に今日のことばれたら、あいつはもちろん、あなたも停学よ?」

「私もですか!？」

「当たり前よ。完全なレイプというわけじゃないんだから、あな

たにも責任はあるとか言うに決まってるわ」

と、年頃の女の子がレイプとか言わないでください！ただでさえ、お母さんの職業柄そう言う単語をよく聞いて、その度に嫌な気分になるんです、こんなところまで聞きたくないです！

「……あら？少し言葉を慎んだ方がよさそうね。……あいつは完全に犯」

「それもダメです！」

何考えてんですか！

「……とまあ、こんな風に人目をばかるとかのような会話を私たちはしようとしてるわけ。あなたの家だと可憐ちゃんいるし、お父さんもいるでしょ？その点、私の家は大丈夫。ね？」

「……はい」

クレアちゃんの家はお母さんと二人きりだそうです。シングルマザーというやつで、しかもクレアちゃんとの仲もめちゃくちゃいいらしいです。いや、じっさいよかったです。何度もお泊りしてましたがとっても仲がよくて、なんだか友達同士みたいでした。クレアちゃんのおうちなら、秘密のお話もできますし、いいかも、しれないです。

「じゃ、行きましようか？」

「はい……」

クレアちゃんのおうちに行くというのに、私の心は陰鬱に沈み込んだままでした。……礼人君、大丈夫かな……？

お宅訪問です！

「たっだいま〜！お母さん、メグ連れて来たよ！」

「まあ、それはよかったわね。メグちゃん、今日はお泊り？ご飯食べてく？」

「え、いや、その、あの……」

クレアちゃんと一緒におうちに入ったら、真っ先にクレアちゃんのお母さんが出迎えてくれました。

クレアちゃんのおうちは二階建ての一軒家で、すっごく洋風です。和風の要素が一切ありません。……っというか、いまだき純和風の家なんてめつたにないですよね。

「お母さん、ちょっと今日はいつもと違うから、私の部屋で話すね」

「……何かあったの？」

お母さんはクレアちゃんの短い言葉でも事情を察します。すごいです。

「ううん。別になんでもないわ」

「でも、メグちゃんいつもと違って元気ないわよ？」

「あーうん。それは、……その、兵部のせいだから」

「……そう。大丈夫なの？」

礼人君の名前が出たら、お母さんは妙に納得して、なおさら私に心配をかけてくるようになりました。

「だから、大丈夫だって」

「そう。なら、いいけど……」

「じゃ、メグ。部屋に行きましょ？」

「う、うん……」

若干無理やりながらも、私はクレアちゃんのお部屋に通されまし
た。

白い壁紙にフローリングの床、大きな本棚に、勉強机、そしてダ
ブルベッド。

相変わらず、クレアちゃんの部屋は簡素です。

クレアちゃんは私に机の椅子をすすめてくれて、私は椅子に座り
ました。クレアちゃんはベッドに座ります。

「……さて、兵部のことだけどね……」

「う、うん」

私は神妙にうなずきました。

「私とあいつは、幼馴染なの」

「そうなの？」

そんな話、初耳です。それで礼人君の好みとかをよく知っていた
んですね。

「あいつは、すっごく感情的なのよ」

「……そう？」

すごく理性的で、かつこいいですけど……。

「というか、本能的」

「それはわかるかも」

好き、って言われてそのまま襲われちゃいそうになりましたから。

「惚れっぽいんだけど、飽きるのもすぐだから、女の子をしょっちゅうとつかえひつかえしてるし、すぐ手を出すし」

「そんな……」

「それに、ちよつとサディスティックなところもあるから、すぐに別れ話切り出されるわけ」

「そ、そうなの」

私もすぐに飽きられちゃうのかな……なんてことを思います。それとも、私が礼人君を嫌いになる？……まさか。それだけはありません。

「まあ、私はあいつの幼馴染だから、結構相談されるわけよ」

「うん」

「それでいい関係になるんだけど、キスもする前に別れるっていうのがほつとんど」

「……なんで？」

「今日みたいなことがあるから」

「……」

キスはしないけどその先はしちゃう……みたいなことでしょうか？な、なんかどことなく犯罪の匂いが……。

「まあ、もちろん今日みたいに止めるんだけどね」

「……な、なんでそんな風にすぐに手を出しちゃうの?」

「そんなの私を知るわけないじゃん。自分で訊きなさいよ」

「うう……」

ひどいです。……ひどくないですね。普通の答えですね。

「で、お母さんがあなたの心配したのは、まあ、普通の女の子ってあんなことされたら傷つくわけ。そのフォローを私がしてるから、なんだけど……あなたに至っては大丈夫そうね」

「当たり前よ!」

「あんたってすっごくレアなタイプね。……ま、話っていつでもそれだけだし。さ、今日は楽しくおしゃべりして夜を明かしましょう?」

「うん!」

クレアちゃんは本棚から私の好みの漫画を数冊抜き取ってこっちに放りました。私はそれを受け取ります。

「これどんなお話?」

「『レディアントガーデン』。光の園に住む人たちの話で……まあ、ようするにギリシャ神話あたりを漫画したような感じかな? 神様とかよく出るからそう思うだけで、私はギリシャ神話読んだことないけど」

「へえ、面白そうですね!」

私はレディアントガーデンを読み始めます。

「……まあ、いいけど。親御さんに連絡は?」

「……あ」

忘れてました。

「じゃ、じゃあちよつと待っててね」

「私はこれ読んどくから、ゆっくり話して」

「ありがとう」

クレアちゃんは本を一冊取り出して、読み始めました。

私は携帯を取り出して、家の番号をプッシュします。

「あ、お父さん？」

『なんだい？』

「あの、今日クレアちゃんの家泊るんだけど……いいかな？」

『こっちは構わないけど、クレアさんの家の都合は大丈夫なのかい？』

「うん」

『そうか。ならいいよ。くれぐれもご迷惑をかけないようにね』

「わかってる。じゃあね」

。。

「いいお父さんね」

「聞いてたの？」

携帯電話をしまうと、クレアちゃんが読書を中断して話しかけてきました。

「ごめんさーい」

「いや、いいんだけど、どうして？」

「……どうして、って訊かれても。いいお父さんだな、って思っただけ」

「そうなの……」

クレアちゃんにお父さんはいません。……中学校二年生の時に、死んじゃったそうです。理由は……今でも、訊けません。だって、お父さんが死んじゃって、すぐく落ち込んでるクレアちゃんを思い出したら、訊けるわけないです。

「……気にしないで」

「え？」

「私はもう、大丈夫だから」

「……本当に？」

あの時も、クレアちゃんはそう言って、痛々しい笑顔を見せました。今のクレアちゃんの微笑みは普通でしたけど、もしかしたら、隠すのがうまくなっただけじゃ……なんて思います。

「ええ。たまに、つらい時もあるけど。それでも、昔よりは減ったわ。あなたのおかげよ、メグ」

「そんな……」

私はなにもしてません。何もできませんでした。何も言えませんでした。

「あなたがいてくれて、お母さんがいてくれたから、私はこうしてられるの。……なんか気恥ずかしいけど、ありがとう」

「……どづいたしまして」

なんだかこれしか言つことのできない私がとても情けなくて……。

「ちょっと湿っぽくなつたね。じゃ、ちょっと下降りてゲームでもしよつか」

「うん！」

「この前とっても面白いゲーム買ってね、ぜひメグにもやってみてらいたかつたの」

「やるやる！」

「じゃ、行きましようか」

「うん！」

クレアちゃんが下に降ります。私もそれについて行きます。

今日はどうしても、楽しい日になりました。

少しだけ、戻ります

少しだけ、時間は戻る。

綾瀬恵が兵部礼人に関して相談していた時のこと。

ほしか
星香 クレアの自室。

トウルルル……

トウルルル……

ピ。

「はいもしもし、クレアですけど？」

『あ、クレアちゃん？私、メグ。夜遅くにごめんね？』

「メグか。いいよ、暇だったし。で？今度は何の相談？」

『バレバレかあ………』

「あつたり前よ。何年あんたの幼馴染やってると思ってんのよ」

『……十年？』

「リアルな数字は出さなくていいの。……で。何？」

どんな些細なことでも、メグは真っ先に私に相談する。それが私にとって心地よかったし、向こうも自分を親友だと思っててくれる証拠だと感じていた。

『あつと、その。私の部屋のこと、なんだけどね………？』

「えなに、どうかした？」

『……このままでいいと思う?』

しばらく、無言。私はかつての自身の言葉を思い出していた。

「……え、まだ一昔前の少女マンガにでも出てきそうなラブリーで乙女チックな部屋のままだったの?」

『そこから!?』

「いや、確か『女の子らしい部屋にする!協力して!』って言ったのって、高校一年の時……だよな?それから二年あったけど、まさか本気で今でもそのまま?」

『う、……悪い?』

悪い。私が。私は内心冷や汗をかきながらそう思っていた。まさか自分の助言がこんなに効いているとは思っていなかった。いつも飽きっぽいメグのことだ、すぐに飽きて部屋を戻す……そう思っていたの助言だったのに。

どうもこと礼人のことに関しては、メグは一切妥協する気はないらしい。そんな確信が私の中に生まれた。

「悪かないけど……。もしかして、兵部が来たときに備えて、自分の趣味、隠してるとか?」

『……悪い?』

「悪くはないけどさ、あんた兵部の趣味把握してる?」

『え、いや、ただだけど……』

「まだ、ってことはする予定なんだ」

『当たり前です!』

「……で、もし兵部が乙女チックすぎる女の子が嫌い、もしくは苦手としていた場合、どうするつもり?」

『う……。で、でも!私の趣味だって、その、男の子に好かれる趣味とは、その、限らないし……』

「あのね。あなたの好きにした部屋でも、嫌われるもしくは避けられる可能性があるし、今のままでもそうなんですよ？同じ嫌われるんなら、ありのままを嫌われたら？作った趣味が原因で嫌われたら、やりきれないわよ？」

むぐ、と息を詰まらせた音が聞こえて来た。……やっぱりなにも考えてなかったな。そんなことを思いながら、私は言葉を続ける。というか、メグは絶対、あれのこと忘れてる！

「てか、まだ家にあげるところか付き合ってもいないのにそんな先のこと考えてる場合か！あなたは真っ先に心配しなきゃいけないことあるでしょが！」

『え？』

「弁当よ弁当！考えた？」

『あ……………あ』

あ、じゃない！忘れてたわね！？

「……………忘れてたわね？」

『ま、まさかそんなわけじゃないじゃないですかクレアさん！』

「嘘つく時は敬語になるって、あんたほんつとにわかりやすい癖ね」

『ふみゆー！』

「唸つてもダメ。……とにかく、あいつの好きな料理、教えてあげるから早くメモリなさい」

『あうんー！』

私は昔のことを思い出しながら、兵部が好きなはずの料理をつらつらと言っていく。ペンを走らせる音がわずかだが聞こえる。

!?

『く、クレアちゃんの……』

「……あの、メグ？」

『裏切り者おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおー!』

ぶちっ!

……うわあ、怒らせちゃった。……まあいや。すぐに仲直りできるはずだし。……というか絶対に仲直りしてやる。是が非でも、だ。……と、言うわけで。

ピ、ポ、パ。

私はメグの妹に電話をかけた。まあ、一応弁解でもしておこうかな。

「あ、可憐ちゃん？」

『あ、はい？なんですか？またお姉ちゃんを騒がせて……』

「ごめんごめん。今回は私のミスだから、その、悪いけど謝って
いてくれる？」

『なんで私が』

「こんどパフェおごってあげるからさ。好きでしょ？」『エンジエ
ルスイーツ』のパフェ」

じゅくり、と唾を飲む音が聞こえた。……よし。

『……し、仕方ないですね。今回だけですよ?』

「はいはい。わかってるわよじゃあね〜」

そう言うと、私は電話を切る。

……ふう。明日どうしようかな……。

私のことを親の仇みたいな目でにらんできたらどうしようか……。

なんて不安を抱えながら……、私は眠りについた。

時は、戻る。

恋食い虫のいいんちゃんさんと、デートの約束！

うっっん……。

目を開けます。

すると、見慣れたような見慣れないような部屋が、私の目に飛び込んできました。

「ここ、どこだろう……？」

「うっっん……？」

あ、そうだ。クレアちゃんの家でした。私、今日は泊ったんですけど。

ゲームをしたあと、ご飯を頂いて、それからお風呂に入って、置かせてもらってるパジャマに着替えて、おしゃべりしながら眠ったんです。

「……おはよう、メグ」

「あ、おはようです、クレアちゃん」

隣で寝ているクレアちゃんが起きました。

彼女はパジャマの胸元をはだけさせて、下もぎりぎりパンツが見えるかどうかの瀬戸際まで下ろされて、って……！！

「く、クレアちゃん、パジャマ、パジャマ！」

「パジャマが、どうかした……？」

「は、はだけてる！めちゃくちゃエッチィ格好になってるよ！？」

私があわてて直そうとすると、ぱっと、クレアちゃんは飛びのきました。

「……ふふふ、メグ？」

「な、何？」

「欲情した？」

「……あのね、クレアちゃん、私たち、女同士だよ？」

「だよね……。本当に欲情してない？」

「あの、クレアちゃん？」

いつものこととは言え、ドキドキします。

クレアちゃんは朝がとつても弱く、どういうわけか少しだけ性格が違うんです。……ちょっと妖艶っていうか、艶めかしいっていうか……。まあ、それでも女同士なので何にも感じませんが。

「今日も礼人君にぶつかるのよね？」

「ぶつかられる気がします……」

それも熱烈に、激烈に。

願ったり叶ったりの状況なんですけど、それでも……その、いきなり襲われるのはちょっと……。

「ま、あいつも人前で襲うほど馬鹿じゃないでしょ」

「……そ、そうでしょうか」

思いつきりクレアちゃんの前でもやめる気なかったですし。

「大丈夫だって！ほら、学校いこー！」

「は、はい……」

もちろん、私はいつも通りの日々が待っているのだと思ってました。

……この日からでしょうか。私の学園生活と日常生活と人生に異常が、いえ、変化が訪れたのは。

「ねえねえ！メグと兵部、付き合ってるんだって？」

「みゃ！？」

登校して教室に入った瞬間、友達の黒月くろつき 沙耶みやさんにそう言われました。

彼女は黒髪眼鏡のいいinchよさんです。……でも、性格はこの通り、恋の話が大好きな女の子なのです。

「どっからそんなガセネタ仕入れたのか聞かせてもらおうかしら、沙耶？」

「ふふふ！情報源は明かさない、それが組織の規則なのだよ！」

「どこの組織よ、それは……」

やれやれとあきれ返りながらクレアちゃんは嘆息しました。ちなみに沙耶さんはどこの組織にも所属していません。

「まあ、別にじかに聞かせてもらったわけじゃないから言っけど、兵部くんがそこらじゅうで喋りまくってるよ？」

「……」

クレアちゃんが黙りこみました。私も、顔を真っ赤にして黙っています。というか、何が起きているのか理解できない、いえ、理解したくないのです。

だ、だって、礼人君が、私と付き合ってるって言いふらしてるって……！

「あ、あのバカ！次にあったら地獄めぐりを……！」
カラリ。

「……でさ、俺一目ぼれしちゃったわけ！あいつはほんつとに最高な女なんだって！」

「はいはい」

クレアちゃんが犯行予告を出したと同時に、礼人君が友達を数人ひきつれて教室に帰ってきました。

「こら！兵部！」

「お、クレアじゃん、どつたの？」

「どつたの？じゃない！あんだ、さっきからなに口走って……」

顔を怒りの表情で染め上げてクレアちゃんは叫びます。それに対

して礼人君は、涼しい顔で答えます。

「俺が綾瀬……じゃなくて、メグのことが好きってことと、昨日告白したらいい返事ももらえたってことを言ってるだけだぜ？」

「なっ……！」

いろいろと事実が変わってます。先に告白したのは私ですし。

「……お、メグ、おはよう」

きらりと光るような笑顔。……ふわ、きれいだな……。

「お、おはようございます、礼人君」

「ん。実は今日な、お前に聞きたいことがあってきたんだ」

「聞きたいこと？」

私は首をかしげます。何だろう？

「お前、今日の日曜空いてる？」

「え、あ、はい」

反射的に答えました。予定なにかあったかな……？

「デートしよう」

「はい」

反射的に答えました。日曜日は空いています、というか空けます。

「って、二人とも私を抜いて話さないで……って、だーめだこりゃ」

クレアちゃんのそんな声も、私にはほとんど雑音にしか聞こえませんが。

「ふふふ、恋人ができたら友情は薄くなる……人は情を一つしかもてないものなのよ！」

「……私はいつでも、メグの親友だけどね」

「クレアがそう思ってるなら向こうもそう思ってくれるよ、きっと」

なんだかとおつてもいいこと言ってるはずなのに、今私の目に映るのは、礼人君だけです。

「じゃ、今度の日曜ね」

「はい……！」

私はわくわくしながら、答えました。

楽しみだなあ。きっと、きっと楽しいんだろう……。だって、好きな人と一緒に行くんだもん、絶対に、どこに行こうが楽しいよ！そんな風に考えながら、私は友達のもとに戻る礼人君を見つめていました。

「……つたく、あんたはいつつも夢中になるとそうなんだから。物や趣味とは違うのよ？」

「わかってるよ、クレアちゃん」

微笑んで、私は言います。

「それならいいんだけどね。……それと、初デートで……いや、なんでもない。これはあんたに言うべきことじゃないわ」

「……？」

「ま、楽しんでください」

「うん！」

私はそれからも、楽しくおしゃべりしてクレアちゃんと沙耶さんと過ごしました。授業？まったく頭に入ってきてませんでしたよ。仕方ないですよね。

そして、土曜日。

受難の日々の、始まりです。

ど、土曜日です……！

「るんた、るんた」

土曜日の朝、私は起きると朝食を作るため、下の階におりました。いつもはお父さんが朝ごはん作ってくれるんだけど、土曜は私が作る番。ちなみに日曜日は妹の可憐の番。

仕事関係でいつも朝の早いお母さんと、主夫なので朝の早いお父さんが、もうすでにリビングにいました。

「おはようメグ」

「おはよう、メグ」

「おはよう、お父さん、お母さん」

私は台所に立って、ご飯を作り始めます。冷蔵庫から卵を出して、それから……。

「ずいぶんとご機嫌じゃないか、メグ。何かいいことでもあったのかい？」

「……な、なにもありませんよ？」

「うそね」

うう……。お父さんもお母さんも勘がよすぎるよ……。

「あなたが異常にわかりやすいんじゃない。ウソつくときだけ敬語って、どんな癖よ」

「うひ……」

治したいんですけど……どうやって治すか分かんないんです！

「で、何があったの？」

「へ？」

「いいことあったんでしょ？何があったの？」

「え、えっと、それは……」

ピンポン！

「あ、お、お母さん、きつと宅急便だよ、早く出て！」

多分違うだろうけど、とにかくこの場をこまかせたら……！

「はいはい。わかったわよ。聞かないで置いてあげる」

そう言ってお母さんは玄関まで行きました。……ふう、助かった……。お父さんともかく、お母さんはそういうことには厳しいかなあ……。ちよつとオープンにしにくいんですよね。

「……彼氏でもできたかい？」

「みゃー!?」

「まさか図星とはね」

「ち、ちちち違います！」

「ほんとに?」

「う、うう……」

な、なんでわかるんですか、というか、どうしてそんなこと……。

「いやあ、それにしても……ついこの間まで『将来はお父さんの

お嫁さんになる！』なんて言っていた子が……彼氏……かあ……
……殺す」

「え」

「いや、なんでもないよ？」

い、いま、今一瞬だけ、ものすごくどす黒い何かが、お父さんの周りに現れた、っていうか、噴出したっていうか。

「お、お父さん？」

「いや、だからなんでもないんだって。別に、メグに手を出したらぶつちぎってやるとか、メグを誘惑したら舌引きちぎってやるうとか、そういうことは全然考えてないからね？」

「……あ、うん……」

ものすごく普段通りの笑顔で、お父さんは言います。けど、けど、なんか黒いです。言ってることもグロイです。と、なんとか思っている間に。

「……め〜ぐ〜？」

そんな、お母さんの底冷えするような声が響いてきました。

「な、なに？」

なんだか、すっごく嫌な予感がしてきます。

「兵部礼人、つて、どんな人？」

「へ？な、なんでお母さんが礼人君のこと……あっ！」

言うてから、あわてて口をふさぎます。……もう遅いですけど。

「礼人君、ねえ。ずいぶんと、親しげで……。ふふふ、こんなもの送りつけてくるなんて、しょっ引かれないのかしら」

どさり、とお母さんは乱暴に宅配便で送ってこられた荷物を置きました。

差出人は『兵部礼人』宛先は、

「は、ハニーって……！」

『ハニー』でした。

な、なんて恥ずかしい……。っ！というか、これ、ずいぶんと大きな荷物ですけど、何でしょう？というか、どうして礼人君私の家の住所知ってるんでしょう？教えていないのに……

「……なか、見てみなさい」

「開けたの！？ひどい！礼人君からの贈り物なのに、どうして……！」

「……違っわよ！これが添えられていたからよ……！」

お母さんは私に一枚の紙切れ……手紙、でしょうか？を渡してきました。私は受け取り、しばらく見ます。

だいたい文面はこうです。

『親愛なるマイハニーへ。』

昨日はいきなり襲って悪かった。俺だってお前を　したくないわけじゃねえけど、それでも人前はまずかった。というわけで、お礼の品だ。明日のデートには、これを着てくるよーに。明日午前六時、駅前に集合な。

「……やめるんだ」

お母さんの高笑いを、お父さんが止める。や、やっぱりこの家の最後の防波堤はお父さんだ！

「何よ。止めたって無駄よ？」

「違う。甘い」

「へ？」

私は、呆然とした声をあげた。

「甘い。甘い。甘すぎる。そんなんじや駄目だ。キミの計画は穴がないがそれだけだ。奴は死ぬ。だがそれだけだ。奴には苦しみを、もつと苦しみを！」

「そ、そうよね！」

そして、口々に残酷でえげつなく、聞いてるだけで全身が総毛立つようなことを、二人は延々と話し合って、だんだんと形になりつつある。ああ、人間二人が話し合えば、こつも確実なことができるんだ……じゃ、なくって！

「二人とも、やめてよ！」

「……だから、地下に閉じ込めて……」

「そうよ、そこから三日三晩……」

「いや、一週間……」

「いえ、そうすればばれる……」

まったく聞いていない。まずいです。このままだと、礼人君惨殺計画が、出来上がっちゃいます！

かくなるうえは……！

「ご、ごめんなさい！」

「え」

「え？」

と、と。

二人の首筋に、手刀をたたきこんで、気を失わせます。コツ？何言ってるんですか、門外不出ですよ。

「……ふう。静かになりましたね」

親にこんなことする私、なんて悪い子なんでしょう……。まあ、お父さんたちも礼人君をどうこうの話をしていたからおあいこですよ、おあいこ。

私は気絶している二人の間をとって、送られてきた荷物を開けます。いくらお母さんでも開封はしなかったようで、開けるのには苦労しました。

ガサゴソと、中に入っているであろう服を想像しながら梱包を外していきます。

かわいい服かな……？きれいな服かな……？ボンテージみたいな服だったらどうしよう……？でも、きつと素敵なお洋服だろうなあ……。うわあ、楽しみ……。

ガサリ、と礼人君の送ってくれた服を目の前で広げてみて。

「……お母さん、お父さん、ごめんな

さい」

何をするよりもまず、真剣に、横たわる両親に謝りました。そのあと起きた騒動は言うまでもありませんが……。

起きた両親は礼人君のことその他もろもろを忘れていたようでした。もちろん、宅配便が来たことも忘れていました。人は本当に嫌なことはすぐに忘れると言いますが……そんな私に彼氏ができることが嫌なことだったんでしょうか？

送られてきた服を着るかどうか悩む以外は、本当に普通の一日でした。……明日が楽しみ、なんですけど……不安になってきました。

デートへ、向かいます。

「あの、お姉ちゃんさ、その、似合ってるよ？でも、さ。あの。や、やっぱりやめとこ？似合ってるし、かわいいよ？で、でも……」

日曜日の朝。普段はえつらそうに何かにつけて突っかかってくる妹の可憐が妙に私に気を使っています。どうしてでしょうか？なんて、訊くまでもなくわかりきっています。

「……でも……」

「その彼氏さんがおかしいんだよ！」

「しーっ！」

「あっ……ごめん」

声を荒げた可憐を、私は人差し指を立てて注意します。お母さんたちには今日のデートは秘密です。昨日頑張って切り出そうとしたんですけど、結局言いだせませんでした。……だって、殺すとかなんとか、言い合ってほしくないですし。

「でも、本当に本気？本当に正気？大丈夫？あの、精神科医なら私の友達が医長さんのところがあるから、その、内密に……」

「変な気回さないでよ！私は大丈夫よ」

「その格好で言われても説得力ないよ……」

げんなりと可憐は言います。……どうしてでしょう？って、訊かなくてもわかりますけどね。

「大丈夫よ、この部屋には合ってるんだし」

「この部屋に合ってもこの社会には合っていないよ！だめだよお姉ちゃん、やっぱりやめといたほうが……」

「いいえ、私は行きます。なにより礼人君のために！」

私は自信を持って答えます。

「……やっぱり精神科医がいるわ。お姉ちゃん病気だ。恋の病だ。盲目すぎるよ、お姉ちゃん……」

「大丈夫！……よね？」

「疑問になるくらいなら着ないでよ！」

でも……。

「そのゴスロリ服、なんとかならないの？本当にホントに、なんともならないの？」

「……多分……」

「お姉ちゃん、かわいいけどすごく、ものすごくイタイよ？それでも、行くの？」

「……うん……」

だって……。最初のデートだし……それに、やっぱり、こういうかわゆい服って、着てみたいじゃない？その、無理やりっていう形でもいいから。

「……お姉ちゃんって、……いや、なんでもない」

「どうしたの？」

「なんでもないの？彼氏さんと仲良くね、って」

「うん！」

私は微笑んで、部屋を出ました。

そろりそろりと、ぬき足差し足。
時刻はちょうど午前五時。両親は絶対に寝ている時間です。
約束は午前六時。妙に早いですが、気にしません。

扉の前まで来ました。……あと、少し……！

「……おはよう、メグ。こんな朝早くからどこへ行くのかしら？」
びくっ！

私はおそろおそろ、ゆっくりと振り返りました。

「お、おかあ、さん……」

そこにはこめかみに青筋を立てた、パジャマ姿のお母さんが。

「は、早いね？」

「ええ。昨日からあなたは挙動が変だったからね。それとなく警戒してたらあっさり引っかけた。……で、そんな服装で、どこいくの？」

「……彼と、デート」

もうウソはつけません。というか今度ウソついたら私が殺されそうです。

私の答えがよほど驚きだったのか、怒りの表情をすっかり消して、ポカンとしました。

「……は？」

「いや、だから、デート」

「誰と？」

「礼人君」

「誰？」

「私の彼」

「……へえ」

すつ、とそれだけを言ってお母さんは寢室に戻りました。……意外です。もしかしたらこれってお許しが出たってことでいいのでしょうか……？

とか、思ってたら。

「お母さん!？」

「古風だけど、やっぱりこういのはね」

「な、なんで一瞬で制服に着替えてるの!？」

お母さんは仕事着……つまり、警察官の制服に着替えて私の前に立ったのです!

「なんでつて、あなたを尾行して、もしその男があなたに不埒な行いをしたら婦女暴行でしょっ引くためよ」

「……大丈夫です」

その点で言ったら昨日の時点でもうアウトだと思つので、私は何もいけません。

「行ってくるけど、ついてこないでよ!？」

「……ふふふ……」

ああ、もう絶対ついてくる気だ!……でも、そろそろ行かないと待ち合わせが……!

「ああもう！行ってきますー！」
「行ってらっしゃい」

意外にもそんな見送りの言葉を言ってもらえました。少し不安だけど、制服姿のお母さんに見送られ、私は待ち合わせの場所に向かっていくのでした。

「……つたく、彼氏ができたんならそう言いなさいよね」
「本当にね」
「あらあなた、起きてたの」
「さつき起きたよ」
「彼氏、消さなくていいの？……昔みたいに」

「何言ってるんだい、僕はそんなことした事ないよ?」

「悪い虫は消したことがあるわよね?」

「……キミに近づくからだよ」

「あらあら、嫉妬深いのね。私も、浮気は許さないタイプだし…

…。あの子は、どうなのかしら?」

「どういこと?」

「あの子、純情そうに見えて内面激情だから。痴情のもつれで刃傷沙汰……あの子なら本気でありえるわよ? なんとって私たちの娘なんですから」

「そうだったらどうする?」

「……できることなら、娘の事情聴取はしたくないなあ……てか、させてもらえないだろうけど」

「ふうん。……ところで、後をつけなくていいのかい?」

「……いいのよ。不純異性交遊に走らないようにする、ちょっとした脅しっただけだから」

「本当にシちゃったらどうするの?」

「その時はその時よ。とりあえず相手の男……礼人君、だったかしら。彼には消えてもらって、まずはそれからね」

「そうだね。……まあ、とにかく。せっかくの休日だし、今日は可憐を連れてどこか遊びに行こうか」

「そうね。運転まかせちゃってもいい?」

「かまわないよ。キミは疲れてるだろう?」

「まあ、可憐の喜ぶ姿を見ればそんなものイッパツよ。……どこに行きましょ?」

「うーんと、最近できたテーマパークは……」

「……あの公園とかよさそうじゃないかしら。たしかあそこって……」

「……が……で……」

「……そうね、そこにしましょ……」

「……じゃあ、準備を……」

0000

デート開始、です！

待ち合わせの場所に、私は五時半……つまり、待ち合わせの三十分前に到着しました。

待ち合わせ場所は私の通う学校の近くの駅。まだ朝なので、いつもは人でにぎわう駅前もかなりまばらです。

「……うう……は、はずかしいよう……」

そして、その数少ない人は私の方を見て驚いたような顔をして、目をそむけて通り過ぎていくのです。さながら、末期患者を見るかのような目で、です。……うう……しんでしまいたいです……と、思ったところで首を振ります。

だ、駄目です駄目です！礼人君とデートするまでは死ねません！何があっても！たとえ死んでも蘇ってみせます！気合で！

なんて思いながら、礼人君の姿が見えるのを待ちます。礼人君……早く来てよお……恥ずかしいよお……。

こんな白のフリルがたくさんついた、まるでフランス人形が着るような服を着ているところを誰か知り合いに見られたら……！たとえば、クレアちゃん。

『……あれ、……あー……。メグ……ですか？』

『あ、はい……』

『……なんでそんなトチ狂ったような格好を？兵部とのプレイ？羞恥プレイ？』

『な、なんてこと言っんですか！』

『あはは、ごめんごめん。でも、安心して、メグ。私はメグがどんなになっても、ずっとずっと、親友だからね？安心してよ？』

とか、なんか意味深に優しそうな目で言ってくるに違いないんです！……うう、本当にありそうで怖いです……。たとえば……。黒月さんの場合。

『……お、メグじゃん、どうしたのそんな恰好して。新しい趣味にでも目覚めた？』

『違いますって！』

『うん？じゃあ、どうしてかな？言ってみ言ってみ？』

『え、あ、あの、その……』

『ふむふむ、』礼人君がこれを着てほしいっていうから……仕方なく……ホントは嫌だけど……でも、気に入ってもらいたくて……？なかなかお熱いことするじゃん！彼のために恥ずかしくて死にそんな格好をして健気に待つ彼女……美談だわ！これは学級新聞に書かねば！ではでは！』

『あ、ま、まって~~~~~！』

学級新聞云々は少し誇張でしょうか？黒月さんプライバシーには厳しいから、許可貰わないと新聞に載せない、って噂を聞いたことがあるようなないような……。

「……あれ、……あー……、メグ……ですか？」

「……お、メグじゃん」

……このパターンまだ妄想していませんでした。でも、もう妄想する必要はありません。実物がここにいますからね！

今、私はきつと羞恥で涙目になっていることでしょう。顔をたこのように紅潮させていることでしょう！

「……………はい」

私は涙声で、そう二人に返しました。

「……………なんでそんなトチ狂った格好を？
それとなんで涙目？プレイ？羞恥プレイなの？」

「いやいやクリア。これは彼女、新しい趣味に目覚めたかも、だよ？」

「ないわ。この子の趣味知ってる？それは」

「言わないで〜〜〜！！」

わ、私の趣味は門外不出です！絶対に誰にも言いません！言わせません！クリアちゃんにはうっかり知られちゃいましたけど、彼女以外には誰にも教えません！

「はいはい。言われなくても言わないわよ。……………あなたの部屋の趣味からみて、あなたは少女趣味、そうでしょ？」

「は、はいはい！」

クリアちゃんの助け船に、私は喜んで乗ります。

「へえ。それじゃあそんな恰好してても問題ないね〜。でも、それ部屋のなか限定だよ？社会に出てきたら浮いちゃうよ？」

「そ、そんなこと言われなくてもわかってます！」

まったく、どうして黒月さんは私が世間知らずみたいに見ているんでしょうか？……………この格好のせいですね、はい。

「……………お、早いじゃん」

「礼人君！」

私は駅前にさっそうと現れた礼人君に一番に返事します。……うん、別に張り合ってるつもりはないんですけど……ねえ。

「あれ、なんでクリアと沙耶もいるわけ？……あ、保護者同伴デパートってわけ？」

「私は別にメグの保護者じゃないわ」

「私もメグみたいな純情な子を娘に持った覚えはありませんな」

クリアちゃんは淡々と、黒月さんは悔しそうに言います。

「そ。じゃ、消えて」

「ずいぶんとごあいさつね、兵部。あんたが消えたら？」

「クリアは親友の恋路を邪魔するの？」

「はん！邪魔なんかじゃないわ、私はメグのことを想って言うの」

「あつははは、物は言いよう、でも、事実は事実だぜ？さあ、消えな」

「なんですって……！」

礼人君に突っかかるうとしたクリアちゃんを、黒月さんが引き留めました。

「まって、まって！今日メグの初デートでしょ？邪魔したら悪いよー！」

「でも、こいつは、こいつは許せない！殺す！」

「若い子がそれ言ったら洒落になんないって！はいはい、早く帰るよー！」

ずるずると、クリアちゃんは黒月さんに引つ張られて行きます。

「クレア！先しばらくは馬に気をつけるよ！他人の恋路を邪魔する奴は、馬に蹴られて地獄行き、ってね！ばいばい！」

満面の、人のよさそうな笑顔でとんでもないことをさらりという礼人君。

「……よし、邪魔ものは去った。じゃ、行こうか」

にやにやと嫌な笑みを私に向ける礼人君。

……あれ、どうしてでしょう。私、礼人君が好きなのに、ものすごく帰りたくなりました。

ちよ、ちよっと待ってください！

場所は、切り替わる。

「……よし、邪魔ものは去った。じゃ、行こうか」

ゴシックファッションに身を包まれた少女、綾瀬恵に少年が声をかける。

少年は人のよさそうな顔つきで、どこからどう見ても、善人ほかならないような目つきをしていた。服装は派手すぎず、地味すぎず。少し社会から浮いてしまっている少女の引き立て役となるには充分なほど、彼の服装は完成されていた。

少年の名は兵部礼人。ゴシックファッションに身を包まれた少女の彼氏、である。

「……はい」

対するメグは少し不安げな表情を見せている。返事もどこか所在なさげだ。

「どうしたの？俺とデートするのが嫌？」

「ち、違います！でも、私、その、どうして礼人君が私の住所知ってたのかな、って……。それから、この服……」

うつむいて、自分の着ている服をさした。礼人はそれに大きく笑い、

「ああ、それはな、住所はクリアのお母さんに、服はお前が着たらかわいいと思ったから、だ！さあ行こう！」

そう自信満々に言い切った。それでもまだ表情の煮え切らないメグにしびれを切らしたのか、強引に手をとってどこへともなく連れて行くとした。

「え、あの、ちょっと、どこへ、っていうか、答えになっているように答えになってません！私は、どうしてこんな服を選ぶに至ったかを訊きたくて」

「イーから来る！今日はデート！ショッピング、ムービー、ゲームにランチ！オールナイトで楽しむぜい！」

子供のようにはしゃぐ礼人に、メグは戸惑いながらも、掴まれた腕を振りほどこうとはしない。

「あ、あの！わ、私今日は夕方に返らなきゃ行けないんですけど」「だいじょーぶだいじょーぶ！俺らの愛を前にしたら、すべての理屈は引っ込まざるを得ないのだ！」

「支離滅裂ですよ礼人君！？」

初めてメグがツッコミを入れた。

「にやはははははは！親御さんに関しては大丈夫！責任は取るつもりだから！」

「え……」

そうさりげなく、当たり前のことであるかのように言う礼人に、メグは顔を赤らめる。

「あ、あの、責任って」

「もしメグができちゃったらちゃんと結婚するって言うてんの！」

「え、……その、今日、スルつもりなんですか……？」

「にははははは！そのとおり！俺は今日一日、お前を離すつもりはないぜ！一生離すつもりはないけどな！」

「え、あの、ちよっと、早……」

ビューン、と効果音がつきそうなほど勢いをつけて走り去る礼人、メグの二人。

「……むづ、やるわね」

それを草葉の陰……いや、駅前の陰から尾行するように二人を見つめていた人間が二人、出てきた。

「ホントホント。まさかこんなに早くどつか行っちゃうとか思わなかった。メグに盗聴器つけたからいいものの、正直ぎりぎりだったかも」

盗聴器がなんたらと物騒なことを言っているのは、黒髪眼鏡のいんちよさん、黒月沙耶。

丸ぶち眼鏡の奥の瞳は好奇と関心の色に満ちており、メグの心配をする色は一ミリたりとも見受けられなかった。

「まだ脅しが足りなかったかしら。手を出したら殺す、って言うてたのに」

物静かに恐ろしいことを言うのは、黒髪長髪のメグの親友、星香クレアだった。

彼女の手はなんの気なしによこに垂れ下っているが、その拳は固く握りしめられ、彼女が抱く感情の色をよく表していた。

「まあまあ。今は静観するだけにしとこ？兵部クンがもし本気でメグに手を出そうとした時は、止めないから、ヤツちやいなさい」

「この場合のヤるとは、殺ると書く。」

「言われなくとも……」

ぎゅ、っとさらに拳を握りしめるクレア。

「さ、尾行尾行。それにしても、似合ってるね、あの二人」

「……………つく。たしかにね」

町をゆく礼人とメグの二人は、さきほどよりも目立っていた。：

…しかし、向けられる瞳は、さきほどよりも奇異ではなかった。

ゴシックファッションに身を包んだ彼女と、質素だが清潔感あふれる彼氏、その二人が織りなす雰囲気はさながらおとぎ話の中のよう。表題を表すとしたら、『科学の国のアリス』とでもなるのだろうか。たしかに、いまだメグは浮いてはいる。いるが、質素な案内役につれられるメグはまるで世間知らずのお嬢様の様で、少なくともさつきよりは周りに溶け込んでいた。

溶け込んでいながら、浮いて。浮いていながら、目立って。

道行く人の視線は、すべてメグに向けられていた。

「にやはははははは！これから楽しくデートしようじゃないか！まずは、映画だ！」

「ちよ、ちよっとまってくださーい！あ、あの、し、視線が、視線が痛いです！」

当事者たちは全くそのことに気づいていなかったが。

「……くす、くれあん、悔しい？嫉妬？」
「……何よその『くれあん』て」

メグ、礼人の後ろをつかず離れず世間話をしながら尾行する二人組は。

「いや、かわいいじゃん？くれあん、ってなんか萌えキャラみたいな感じで」

「……あなたも、礼人と一緒に海に沈む？」

「………礼人君、沈める気なんだ」

「ええそうよ。大阪湾か東京湾、日本海に東シナ海、太平洋に大西洋、インド洋に黒海。どれがいい？」

「………最後ちよつと違うんじゃない……？」

「どれがいいの？」

「………ううんと、黒海」

「わかったわ。ヨーロッパ行きの手ケットを手配しないと……」

「ちよ、マジですか！？」

「冗談よ」

そんな楽しい会話をしながら、尾行を続けるのだった。

え、映画館です……

電車に乗り、二駅過ぎた次の駅で降りると、映画館のある町に着く。

メグの自宅がある町は田舎のような、都会のようなどうにも中途半端な場所で、映画館のような広い場所を必要とする娯楽施設は街に行かないとないのだった。

「あ、あの、こ、これ見るんですか……？」

「おう！ どうだどうだ！ 『死霊のはらわた』 っていまどきこんなタイトルだぜ！？ 見なきゃ損だろ！」

「え、ええつと……？」

メグと礼人が見つめる先にある看板には、大きく『死霊のはらわた』とあった。

あんまりにもベタすぎてツッコむ気にもなくなるタイトルである。

「よし、怖かったら遠慮なく俺の腕を掴んでいいんだぜ？」

普通、恋人同士が見る映画といったら、たいていがラブロマンスである。が、『死霊のはらわた』なるものがそのジャンルであるかどうかは明確であり、そしてそのタイトルが意味するジャンルもまた、明確だった。

「う、うう……はい……」

話は変わるが、吊り橋効果、というものがある。

吊り橋の上で異性に告白なりお茶に誘うなりすると、された異性

は吊り橋の上にいる時の恐怖と、恋愛感情をこっちゃんにしてしまい、告白に対していい返事をしちゃったりお茶に誘われちゃったりする、というものだ。恋人同士であっても、それは有効かもしれない。もちろん、兵部がこのことを知っているし、映画の選択をしたのも、彼だ。

……まあ、だからと言ってなんの関係もないが。……なんの、関係もないが。

話は戻る。いや進む。

「……な、なんであんなタイトルなの……？ 兵部のやつ、正気を疑うわ……」

後ろを見守っていたクレアが、おのきながら言った。
隣にいる沙耶はくすくすといやらしい笑みを浮かべている。

「あれ、くれあんはホラー苦手だっけ？」

「……に、苦手なんかじゃ、ないわよ……。で、でも、どうもその、妙に非科学的なのは……その、手がつけられないじゃない」

「ああ、苦手なんじゃなくて、怖いんだ」

「……ち、違うわよ！」

「否定にずいぶんかかったね、くれあん。よし、そこまで言うのなら一緒に見に行こうよ。私もいまだきあんな陳腐なタイトルでやってるホラー、興味あるもん」

「い、いや」

ふるふると涙交じりにクレアは否定する。

「……ふふふ、大丈夫大丈夫。怖くない、怖くない。……そうく

れあんが言ったんだよ?」

「う、……そ、それは、そうだけど、お、お金、もったいないし、近づきすぎてばれても、だし……」

「お金は私が出すよ。近づきすぎに関しては大丈夫。きっと二人の世界に入っちゃうって」

クレアの出す理由を、ことごとくつぶしていく沙耶。

「う、うう……うううー!」

唸るが、言葉は出てこない。

「どうする? 行く? 怖いって素直に言えば、許してあげるけど?」

「う、うう! だ、大丈夫だもん! ほ、ホラー映画なんて、なんてことないもん! 何十本でも見れるもん!」

幼言葉になって彼女は叫ぶ。クレアは意地になったら確実に損をするタイプである。

「よし、じゃ、これ終わって、尾行が終わったら私んちでホラー映画見よ! 『ライブズ』とか『ホライゾン』とかいう怖い映画いっぱい録画してるんだ! ほら、ニユースで一時期社会現象になったじゃない! あの、『家族が信用できなくなる』っていう触れ込みで、実際そうなった人がたくさん出てきたやつ!」

「あ、あれ? ほ、ほんとに、あれ見るの?」

お願いだからウソだと言って、という思いを込めて沙耶を見るが、彼女は満面の笑みで首を縦に振った。

「まあ、まずはこれ見て、それから『ホライゾン』ね」
「そんなあ……」

半ば強引に沙耶に引き連れられながらも、クレアの足は映画館に向かつていくのだった……。

ちなみに、余談であるが。伝説的な大ヒットと社会影響を及ぼした『ホライゾン』はその名の通り『現実と虚構の世界の境界線にあるホラー』を指して製作された。そのあまりのリアルさに社会現象まで巻き起こし、最終的には回収騒ぎとなった。その大ヒット問題作を、なぜ沙耶が所持しているのか。それは、彼女が部類のホラー映画マニアであり、上映された『ホライゾン』の海賊版を製作したからである。販売はこそしていないものの、それだけで十分にメグの母親のお世話になる資格がある。

……とまあ、そんなことはさておき。

映画館内。

「……………」
「ひゃー。なかなか人がいるじゃねえか。こういうのってB級だろ？なんでこんなに人がいるんだよ？」

きゃっきゃと騒がしく礼人は話しかけるが、メグは返事をしない。彼はそれを恐怖によるものだと解釈した。

「メグっち、怖いのか？」
「え、は、め、めぐっち？」

気軽に話しかけると、メグはかわいく戸惑った。

「……いや？」

「え、あの、その」

「嫌なんだ。じゃあ、別のにしよう。……メグメグ？」

「え、ええつと……」

「嫌？」

「ええつと……」

「じゃあ、メーとか？」

「羊さんみたいです……」

「じゃあ、ハニーは？」

「え」

メグは、どうして今の流れハニーになるんですか？
とか思っていたが、礼人にはまったく届いていなかった。

「よし、決まり」

「ええ！？」

さつきまでちょっとでもそぶりを見せたら変えたのに、どうして
ですかっ!？

なんて心の叫びも聞こえないし届くはずがない。

「俺が気に入ったから俺は今日からメグのことハニーって呼ぶな。
くくく、クラスの連中、どんな反応しやがるかな……?」

すっごくいやらしい笑みを浮かべて、礼人は言う。と、そこで、
何かに気づいたような表情になって、ポン、と手を打った。

「そうだ、今のままじゃあ俺がただお前のことを『ハニー』って
呼ぶ変なやつじゃん？」

自覚はあったんですか……。なんて、思っても口には出さないメ
グ。

「じゃあ、今日からハニーは俺のこと『あなた』って呼んべよ」

「……………え、ええつと……………」

「うん、決定」

「そ、それって、その、ふ、夫婦がするものなんじゃ……………」

「一緒だよ一緒。恋人同士なんて夫婦予備軍みたいなものじゃん
？」

「それはそうかもしれませんが……………」

そこで納得するあたり、メグもメグである。それでも、なにか釈
然としないメグだった。いくら納得していなくても、メグは基本的
には礼人に従順である。でなければこんな、ゴシック調の服など着
てくるわけがない。よって。

「……………わかりました……………」

彼女には、そう答えるほかありませんでしたとさ。

映画上映です！

闇が迫ってくる。

闇の量は多く、また、その力も圧倒的であった。

彼と彼女は、命からがら死の館から逃げてきたのであった。それでも、二人を追う闇からは、逃げられなかった。

「い、嫌……」

彼女は迫りくる闇を前に腰を抜き、身動きが取れない。

「う、ぐう……！」

彼は闇にのまれつつある。今まで彼らが葬ってきた死霊、それらの恨みが集まった闇なのだ、彼と彼女には執念を持って襲いかかっている。体勢を崩された彼と彼女に、闇を追い払う力など、あるわけがなかった。

「い、いや……！」

「に、逃げて！ 逃げてくれ、クレア！」

彼が叫ぶ。

「嫌！ 私は……！」

彼女はなんとかして彼を助けようとしている。が……。闇に触れたら最後、二度と離してはくれない。それを彼女もわかっているから……。逃げずに、彼と命運をともにしようと考えている。

「に、逃げてくれ、クレア……頼むよ。今なら、今なら君だけは助かるんだ、だから……！」

「嫌！ あなたを失って、私はこの先一体どうやって生きればいいのか!?」

「僕がいなくなったところで、君は死にはしない！ だが……ら、………にげ………っ………。
クレア………」

ずぶずぶと、ずぶずぶと。彼は闇にのみこまれ、そして、ついに、見えなくなつた。

「あ、ああ……。ローレンス……」

彼女は彼の名前を呼ぶ。いとおしげに、悲しげに。

「愛していたわ……いえ、愛しているわ……」

闇が、彼女の体を包む。彼女は激痛にさいなまれるが、もはやそれは苦しくもなんともなかった。どころか、彼と一緒になれるなら、と幸せですらあつた。

「………また、一緒に………」

その言葉を最後に、彼女の意思は、闇に完全に飲み込まれた。

「……………ぐすっ」

「……………あぁ……。その、なんだ」

映画館のすぐそばの公園。メグと礼人はそのベンチで座っていた。

メグは目に涙をため、ハンカチでとめどなくあふれるそれをぬぐっている。

まったく、女ってやつはすぐ泣くな……。とか礼人は思っているが、彼の目じりには液体が流れた跡があった。

「バッドエンドだったけど、面白かったじゃねえか」

「ハッピーエンドです！」

メグは言いきった。

「……………そうか？」

「そうですね！ 愛するひとと一緒にいれるなんて、最高の幸せじゃないですか！」

「でも、二人は死霊に食われて……………」

「そんな些事はどうでもよいのです！」

些事か？ とか礼人は思ったが、あんまりにも熱弁するメグが珍

しかつたので、黙って聞いている。

「愛は、恐怖や恐れも幸せと変える力を持っているのです！ ああ、私も死ぬならあんな死に方がいいです……」

感極まったような言い方で、彼女は言った。

「……まあ、それについてはだいたいおんなじだけどよ……。その『愛する人』って、俺のこと、か……？」

いつも自身に満ち溢れている礼人としては珍しいことに、不安そうな表情を礼人はしている。

「……もちろんですよ。わ、私、言ったじゃないですか。私、礼人君……あなたのことが、大好きなんですから」

「……ありがとう」

メグはもう一度ハンカチで涙をぬぐうと、立ち上がった。

「あ、あの、あなた。お食事にしませんか？」

「おう、そうだなハニー。近くにゃファーストフードしかねえが

……」

「構いませんよ、あなたとなら、どこへでも！」

「……ありがとう」

ふつと、礼人は優しげな表情を浮かべ、メグをエスコートするのだった。

同時刻、同公園内で。

「……………あんなのってない！」

「はいはい。さつきからクレアそればっかだね」

クレアと沙耶がさつきと変わらず二人を尾行、盗聴していた。

移動する二人を追いかけながら、沙耶たちはさつきの映画について話しているのだった。

「ねえ、あんなのありだとおもう！？　なんで最後にあんな無理やりいい話に持っていきこうとするのかな！？　というかそもそも名前からして気に食わないっ！」

「それに関してはご愁傷さまとしか……………」

さきほどの映画、沙耶の中では意外と高評価だったりする。

B級映画にしては非常に凝った作りをしていて、よくこんな時間あつたなあ……………と感心させられる場面が多々あつた。……………クレアやその他大勢の素人さんはそのことに気づかなかつたようだが。

だからと言って、クレアの憤慨……………というか不満も理解できないわけではない。どころかよくわかる。

クレア、沙耶。ともに物語の中ではよく出てくる名前である。

「……………な、ん、で！　あんな風に最後ヒロインはあきらめたの！？　幽霊バカス力撃ち殺してローレンスのことだって全然気にかけてない、みたいなそぶり見せといてなんで最後の最後であんなこと言うのかな！？」

「ああ、それに関しては、一言」

「なに？」
「ツンデレだよ」
「……つん、でれ？ ロシアとか、もっと寒い地域とかのこと？」
「それはツンドラ」
「こつ、髪を二つにくくること？」
「それはツインテ」
「……じゃあ、何？」

沙耶はホラー映画だけでなく、日本のサブカルチャーのほとんどを網羅している。アニメ、マンガ、小説……ライトノベル。ひらたくありていに言えばオタクとなる。
一方クレアは普通の少女である。少し言動に過激なところがあるが、まあ、それは普通の範疇である。

「ツンデレ、っていうのは……クレアみたいななの」
「……はあ？ って、どっちのクレア？」
「どっちも」
「はあ？」

さっきの映画と自分が同じだといわれて、ますます混乱するクレア。

「ツンデレ、っていうのは、普段ツンツンしてるけど、二人っきりのときとか、一定の条件満たしたらデレデレになるキャラのこと。ツンツンしてるけど実はデレデレ、ツンツンデレデレ、ツンデレ、みたいな感じかな？」

「……それってさ、なんか本気で嫌ってても、なんかそれっぽく解釈できるんじゃない？」

「まあね？ クレア、礼人のこと好き？」

「嫌い」

「よね〜。でも、見る人が見れば、クレアって充分ツンデレだよ」
「……」

スーパーポジティブな考え方に、クレアはしばしあっけにとられる。

「……くだらない」
「だね〜」

会話をきりやめ、二人はまた、尾行を始めた。

昼食、ジャンクフードです！

おいしい食事というものは、家族と一緒に囲うものが最高だ、という人間はそう少なくない。それは決して錯覚でもなんでもなく、愛情……、この人と一緒に食べていると楽しい、うれしい、ほっとする。そういった感情が味覚の鋭さを上げているのだ。料理がおいしくなったわけではない。それを食べる側が、鋭くなっているだけである。

なにも、そう言った意味でのおいしい食事は、何も家族だけではない。親しい間柄、気の置けない友人同士、そして、恋人同士であっても、なりたつのだった。

「……………なんか、メグと一緒に食っているとウン百円のハンバーガーがうまくなるな」

「私もです！」

全国……それも、国境を越えたレベルの全国にチェーン店を持つ、超有名ハンバーガーショップ。彼女らはその窓際の席に座り、ハンバーガーをほうばっていた。

「あの、礼人君」

「うん？」

最初こそゴシックファッションに身を包んでいることを気にしていたメグだったが、今では特に気にした風はない。あきらめたか、それとも恋人が目の前にいることで盲目になっているかのどちらかだろう。

「あの、この服と違って、あなたの趣味なんですか？」

「いや？ でも、ハニーが来たらきれいだろっなって」

「……そ、そんな、おだてないでください」

「俺はおだてたりすんのが苦手なんだよ」

「でも……」

「ま、趣味じゃねえって言ったらウソになるかもしれねえけど。

似合ってるぜ」

「……ありがとうございます」

メグは顔を赤らめた。

「これからの予定とか、決めてるんですか？」

「カラオケに行く予定だけ……嫌だった？」

「まさか！ カラオケ大好きです！」

メグの笑顔はひきつっていた。彼女はカラオケが苦手なのである。それでも大好きな礼人の手前、無理をする。

「そりゃよかった。そうそう、これはちょっとした話なんだけどもよ」

「？」

「最近のカラオケじゃ、一つ一つの個室に監視カメラがついてるんだって」

「へえ。何ですか？ プライバシーとかあると思っんですけど……」

にい、と礼人は笑った。すごくいやらしく。

「たしかにな。恋人同士がやるのも、プライバシーだよな」

「！？」

茹でられたタコのように顔を紅潮させて、言葉にならない言葉を叫ぶメグ。

「ま、まさか、れ、礼人くん」

「だから、監視カメラついてるって言ってんだろ？ 何もしやしねえよ。……カラオケでは」

「え？」

「……なんでもねえ」

「いや、なんでもなくて済みませんよ！？ なんか今すっごい発言を」

「カラオケの後は、家に招待しようかな、と」

「……え」

「ちなみに、両親はいない」

「……え」

両親のいない男の家に上がりこむ。それがどんな意味を持つかわからないメグではない。どころか朝母親に釘を刺された手前、そうなるにはならないと思っていた。しかも、デートが始まるまえ、信じられない宣言をされたこともあって、メグは内心冷や汗たらたらだったりする。

「あ、あの」

「ん？」

「あの、私、その……」

「今すぐ行きたいってか？」

「いえ、そうではなくて……」

「どうしたの？」

「……その、今日はお邪魔になるわけには……」

「どうして？」

「……ええっと……」

まさか母親に言われたから、だなんてもう高校生にもなってるわけがない。

「あ、あの。うちの門限、八時なんですけど……」

「あ、そうなんだ。じゃあ、無理だな。今日はカラオケで歌って帰るか」

すぐに了承してくれたことを意外に思いつつも、メグは肩を落とした。これで礼人君を犯罪者にしなくて済みます……。そう安堵する。

実際もしそんな関係になってしまった場合、メグは彼氏が檻に入ることよりも命の心配をしなければならぬのだが……。今の彼女に、それを知ることはいらない。

「そうですね」

昨日とは全く違う、健全なデートを楽しめる……。

今のメグは、そんな希望に満ちていた。

二人が今後の予定を決めている最中、その遙か後ろでは。

「……むう、カラオケ、ねえ」

「健全でいいことじゃない。あの子も少し安心したみたいだし」
「……でも……」

クレアは不安げにメグたちの方を見る。どうも、安心できる要素がなかった。たとえ今は手を出さないと書いていても、さっきの宣言、つまり責任とってやる云々のせいで、まるで信用できなかった。

「……大丈夫かしら？」

「メグの貞操のこと？」

「……まあ、そうよ」

そっけなく装っていたが、クレアの頬は少しだけ赤かった。

「まあ、大丈夫じゃない？ 監視カメラあるって言ってたし」

「……屋上でも襲うような奴よ？ 私が隣にいるにも関わらず」

「……そりゃ大変」

口ぶりではそう言ったが、沙耶の表情にメグを心配する色のものはなかった。

「あんたねえ。親友なのよ？」

「クレアはね。メグはそうでもないよ」

「なんてあっさりな……」

「わきまえてると言っつてよ」

「うっん……」

冷徹にも聞こえるが、沙耶がメグを心配しないのは、彼女が親友

でないからではない。心配する必要がないからだ。沙耶は口にごそ
出さないが、メグのことを親友と思っている。

「大丈夫だよ」

「どうして？」

「礼人君はね、乱暴そうに見えて、すっごく相手のこと思いやる
タイプだよ」

「昨日の襲撃は？」

「それは、その、もてあましたんじゃない？ いろいろと」

「今日はおもてあまさないと言言できる……？」

「……………心配になってきた」

沙耶は早々に前言を撤回した。

わ、わた、私が……！

「……こ、ここがカラオケ、ですか」

「入ったことねえの？」

「……はい、実は」

狭く、煙草の匂いの充満するカラオケ個室内。メグは鼻を押さえながら答えた。彼女がカラオケが苦手な理由。それは、一度たりとも入ったことがないからだ。

「歌いたい時とか、どうするの？」

「歌います。その場で」

「へえ。自由だな。俺はとてもじゃないけどできねえや」

彼の言葉にとげはなく、声には感心したような色があった。

「へ、変じゃないですか？」

「別に。アカペラで歌うメグも想像したら、結構かわいいぞ？」

「……！」

またメグは顔を赤くした。

「さて、と。歌うか。まずは俺からでいい？」

「あ、はいどうぞ」

「ええと、やり方教えるぞ。まず、この液晶を選んで、検索、結果をタッチして……」

テレビの横に備え付けられた端末を持ち、実演しながら説明する。

「……びっくりです」

「何が？」

「私、カラオケって本を見て、それから曲の番号を入れるものとばかり……」

「……ああ、それ、結構前のことだぜ？ 今はだいたい、こんな感じ。……田舎じゃ、どうか知らないけど」

ぴ、ぴ、とタッチペンで液晶をタッチしながら礼人は言う。

「よし、入力終了」

と、ほぼ同時に、曲が流れ始める。アップテンポの曲で、なめらかな音がいくつも続く。

礼人はメグに視線を一度向けてからマイクを手にし、歌い始めた。

「」

熱烈なラブソング。歌詞の中には性愛の相手として求めるようなものもあったが、彼は臆することなく、むしろ強調して歌った。

「……よし、終わり！」

歌い終わって、少し暑くなったのか、礼人は冷房をつける。

「……え、ええっと……」

メグも拙い手先で曲を入力する。曲が始まり、前奏が流される。ローテンポの曲で、彼氏に対して引つ込み思案なメグをそのまま表したような曲だった。

「……………」

きれいな歌声が部屋に響く。礼人は拍手も忘れて、その歌声に聞き入っていた。

「……………」お、終わりました……………」

「すげえ」

礼人はきらきらした目でメグを見つめる。

「え、ええ？」

「ハニー、お前最高。なんでこんなに歌がうまいんだ！……………」とおしくなってきた」

ドサリ。自分が押し倒された音だとメグが知るの、視界が礼人の顔でいっぱいになってからのことだった。

「……………」ふえ？」

「ごめん、メグ。嘘だった」

「え？」

「ちよっと、な」

「え、ちよ、ちよっと待ってください！そ、そんな、今日は「いいじゃねえかよ。……………」今日はあのうるさい奴もいねえしよ」

すぐにクレアのことだとわかった。メグは、かすかな嫉妬を胸にとす。なんで、こんなところで、こんなことしてるのにクレアさんのこと思い出すんですか？そんな理不尽ともいえる感情が、彼女を大胆にさせた。

「……………」やめてください！」

ドン、と礼人を突き飛ばす。

「うわ、え、ギャツ!？」

まさかメグに突き飛ばされるとは思っていなかったのか、抵抗もせずに吹き飛ばされ、礼人は後頭部をテレビに打ちつけて、それきり動かなくなった。

「え、れ、礼人、君？」

おっかなびつくり、メグは礼人に駆け寄る。ピクリとも動かないいや、動いてはいるが、細かく痙攣している。

「……も、もしかして私、殺っちゃいました？」

ズーン、と後悔と絶望がメグの頭を駆け巡る。恋人を殺してしまった!？」

「う、うわ、た、大変、です、わ、私、れ、礼人君を、こ、ころ、殺し……」

きゆう。小動物が息絶える時のような声をあげて、メグは気を失ってしまった。

「……ったく」

それと同時に、事の成り行きを盗み聞きしていた二人が二人のいる部屋に入ってきた。

「面白いくらい簡単に気絶したね」

「まあ、それだけ重要事項なんでしょ、メグの中じゃ。私だったら、こいつ殺したぐらいじゃ、なんとも思わないけど」

「殺したことなくせに」。クレアみたいのはね、本当にやっちやったらメグ以上にあたふたするのが定説なんだよ？」

「うっさい！ アニメマンガと私とを一緒にするな！」

「にふふ」

「冗談を飛ばしながら、二人はてきぱきと二人の死体？ を片づけていく。クレアはメグを肩に担ぎ、沙耶は礼人の足を持つ。

「……沙耶、まさかとは思っけど、それで帰るつもり？」

「うん？ あったりまえ」

このまま沙耶がどこかへ行けば、礼人は引きずられることになる。

「だって、メグをやるうとしたんだよ？」

「親友じゃない、んじゃないかったの？」

「友達だもん」

「……やれやれ。あんたも相当意地っ張りね」

「む。くれあんのくせに生意気だぞ？」

「くれあん言うな」

ズルズルと音を立てながら、二人はカラオケを出た。店員には、『こいつ酔っぱらってるんで』で、通した。……よく警察を呼ばれずに帰れたものだ、とクレアと沙耶はわりと冗談抜きでそう思ったのだった。

はっ！？ ゆ、夢でしたか……？

ファンファンファンファン……。

音が聞こえます。なんだか、テレビとかでよく聞いたことのある音です。

『た、ただいま容疑者の少女が出てきました！ ずいぶんと性悪な目をしております！ 彼女が、自分の恋人を手にかけて残虐な少女、綾瀬 恵です！』

リーポーターの人が、とんでもない誹謗中傷を言ってきます。なんでですか？ 私、誰も殺したりなんか……。

その時、場面がふと、移り変わります。大きな黒の額縁に飾られた写真を胸に掲げた、女のひと。直感で、その人が礼人君のお母さんだと思いました。そのひとは黒一色の服を着ています。……どうして？

そこで、すべてを思い出します。生まれてはじめてのカラオケで歌ったら、礼人君が襲ってきて、それで……。

私、彼を

「いやあああああああああ！？」

私のがばりと体をはね起こしました。

「なにになになにつ！？ 泥棒！？ 強盗！？」

と、同時に、妹の可憐がコンバットナイフを手に私の部屋に飛び込んできました。なんでそんなものを……。

「な、な、なななんでもありません！」

「……あ、そう。夢オチ？」

「……うう、そうです」

恥ずかしながら、そのようです。……そうですよね？

「ほんと、昨日はびっくりしたんだから。気絶したお姉ちゃんを担いでクリアさんがきて、『この子、倒れてたから』って。まさか、彼氏に乱暴されたんじゃない？」

「ち、ちちち、違います！」

「違いますけど、違います！」

「じゃあなんで倒れてたのさ？ それとも、記憶がない？ 記憶が飛ぶほど酷いことされたの？ ……よし、おかーさむぐつ！？」

私はあわてて可憐の口をふさぎます。びっくりした可憐はコンバットナイフを持ったまま暴れて……って、危ないです！

「か、可憐、あ、暴れないで！」

「むぐぐ！」

「わ、わかった、離す、離すから！」

私はぱつと手を離しました。

「ぶは〜！ 何すんのよお姉ちゃん！」

「何言うつもりだったのよ可憐！」

「お姉ちゃんを彼氏から守ってあげるの!」

「別に、私は礼人君に酷いことされたわけじゃありませんよ?」

「敬語!」

あつ! そ、そうでした。私、嘘をつくときはなぜか敬語になるという不可解な癖があるのです。……なぜでしょう。

「なんでそんな、お姉ちゃんを乱暴するような奴をかばうのさ!」

「好きだからです!」

「好きだったら何されてもいいの!?」

「いいんです!」

「……むう、頑固な!」

頑固で結構です。私は礼人君のことが好きなんですから。

「もう放つといてよ。さ、どっか行って。私、学校行くから」

時計を見ると、もう八時です。今から行って間にあつでしょうか?
間にあわせてみせます。

手早く着替えると、私はリビングに降ります。お父さんとお母さんが
仏頂面で……って、え?

「お父さん、お母さん?」

「……やあ、メグ」

お父さんは笑顔です。でも、笑顔だけです。意味、わかります?
全身からものすごい怒りのオーラというか、なんというか、
すさまじいものが……。

「ど、どどど、どうしたの……?」

「今ね、私、上に言っただ逮捕状頑張つてとつてもらつてるところなの」

「え？」

「兵部 礼人。彼……君の彼氏なんだろう？」

「！？ な、なぜそれを……？」

どうして？ お父さんには言っていなかったはずなのに……！

「私が話したのよ」

「そんなんっ！」

「君は、父親に見せられない男を、選ぶ、つもりかい？」

お父さんは文節で区切つて、言いたいことを強調します。

「そ、そんなんつもりはあ」

まずいです！ い、一瞬『ありません』って言いそうになりました！

「……な、ない、です」

「ふうん、そう」

あ、言っちゃった。で、でも、気づいてない、みたい……？

「学校、行つてきなよ。彼氏がいるんだろう？ 見納めになるかも知れないから、よく目に焼き付けておくんだよ……」

そう言つて、お父さんは私を押し出しました。え、な、ななななんですか？ なんて見納めになっちゃうんですか？

「だから、殺つちや駄目って言うてるじゃない。逮捕よ逮捕」
「それじゃ又ルい。さ、行ってらっしゃい」

え、ええ〜。

「い、行けるわけじゃない！ そんな怖い会話しないでよ！」
私がそう叫ぶと、二人は顔を見つめあって……。

「ねえ、あなた。行ってきます」

「ああ、行ってらっしゃい。害虫には、気をつけるんだよ？」

「ええ、わかってるわ。ゴキブリとか、蚊とかハエとか、この世に必要な者には気をつけるわ」

「うん、そうだよ、この世に必要な者を逮捕するのが、君の役目だからね」

「あら、そう言えばメグ、あなたの周りにそんな人はいないかしら？」

「それで隠したつもりっ!？」

平然と訊いてくるお父さんたちに、私は思わずそう言ってしまいました。

「冗談だよ。僕たちがそんなこと、するわけないこともないじゃないか」

「ええ」

「そうですか！ 安心しました！」

……今少しだけ変なところがありましたけど、気のせい、ですよ
ね？

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃい!」

私は不思議に思いながらも、学校へ向かいました。

ちよつとだけ……

学校にたどりついて、教室まで走って行くと、私は真つ先に礼人君の姿を探します。しばらく教室をきよきよして……いました！ 私は他の男子生徒と一緒にたむろっている礼人君をみかけると、急いで駆け寄ります。

「礼人君！ 大丈夫ですか？」

「ん？ …… ああ、大丈夫だよ、ハニー」

「よかったあ……」

私は胸をなでおろしました。よかった、死んでなかったです……。つて、……。え。

「そ、そそそそ、そう言えば、昨日礼人君、死んじやったんじや！？」

「いや、死んでたら来れねえし。ハニーは心配性だな。ちよつと頭ぶつただけだつて」

「そ、そうですか、よかった……」

へなへなど、全身の力が抜けました。もし礼人君があの時死んでしまつてたらどうしようかと思いました。もう二度と礼人君と会えないなんて、そんなのは嫌です。

「……おはよう、メグ。昨日はお楽しみ？ でしたね」

「おつはようメグリン。昨日は面白かったね」

「え？」

にやにやと嫌な笑顔を浮かべている親友二人が、私に話しかけて

きました。……ど、どうして昨日のことを二人は知っているんですか……？

「ん？ お前ら昨日帰ったんじゃないのか？」

「んなわけないでしょ。親友の危機だったのに」

「……お前、その親友の信頼を裏切った、とは思わねえのか？」

礼人君はフランクにクレアちゃんに話しかけます。それを羨ましいと思う反面で……いつかきつとこんな風になるぞ、と決意もします。

「……それは、思ってたけど……」

クレアちゃんはしょぼりとうつぶさきました。……別に、私は何も思っていないんですけどね。だって、その、昨日は何もなかったですからね。

「ま、反省しているならよいではないか、くれあん！」

「……くれあんいうな」

「でも、もし私たちがあなたたちのあとつけてなかったら……。今頃、事件になってたかも知れないんだよ。『女子生徒傷害事件』！
みたいな見出しで」

ピクリ、と私は肩を跳ねさせました。今日夢見たままのことを、沙耶さんは言ったのですから。

「……それは困るな」

「でしょ〜？」

沙耶ちゃんはからからと笑います。無邪気な笑い方ですが、なん

だか裏があるような笑い方でした。

「……………そう、よね」

礼人君が納得したのを契機にしたかのように、クレアちゃんが顔をあげました。無理やり笑顔を作ると、礼人君の胸をとん、と軽く叩きました。

「そうよ。あんたがメグに手を出さないか心配だったの！ わかる？」

「言われなくてもわかるっての。こっわいお目付け役ってところだろ？ クレア、本当にこいつのこと好きなんだな」

「そうよ！ あたしの目が黒いうちは、メグの同意なしに手出しさせるもんですか！」

クレアちゃんも、礼人君も、沙耶さんも、みんな笑いだします。

……………その横で、私は胸の中に生まれた暗いキモチを抑え込むのに必死でした。

クレアちゃん、まるで礼人君が納得したから、元気になったみたいいな……………そんな感じでした。

礼人君も、クレアちゃんが元気になって嬉しそうでした。

幼馴染のいつもの空気、というのは理解しています。ちゃんと、わかっていきます。

「……………あ、メグ。今週の日曜もデートしようぜ、デート。今度は遊園地行こう」

「……………」

答えなきや。はい、って。私は礼人君のことが好きなんですから。

だから、でも……。

「……わかりました」

ちゃんと、答えました。ちゃんと、肯定しました。……でも、この前みたいに心は高揚しません。クレアちゃんに抱いたままの黒い感情が……私の中で暴れまわります。

「……」

答える時の私を見ていたクレアちゃんの目が疑心に満ちていました。それが、私には咎めるような物に感じられました。

『……ウソツキ』

なぜか、そう言われたような気がしました。

「……」

私は大好きな礼人君がそばにいるというのに……彼の視界から消えるように、教室を抜けだしました。

……今は、独りになりたい。

チャイムが聞こえたけれど、今の私にとって学校の授業なんて、もつとつでもよかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6947k/>

私と彼の甘いはずの日々

2011年1月8日12時26分発行